

## マイトリパの弟子ヴァジラパーニをめぐる宗教家と 『上師相承次第口訣』(*Guruparamparakramopadeśa*) 和訳研究 (1)

静 春樹

### はじめに

インド仏教金剛乗の修習論で大きな役割を果たす四歡喜説に相関する四印契 (*caturmudrā*) を羯磨印・法印・大印・三昧耶印の順番とする設定に基づく理論体系は、十一世紀前半から中期にかけて活躍したマイトリパ (*Maitri-pa, Maitrigupta, Maitreya-nātha*, 別名アドヴァヤヴァジラ *Advayavajra*, 986~1063 or 1064) が主導したものであり、彼の弟子たちの理論展開と相まってインド・チベットで有力な法流が形成された。これに対して、四印契の順番で大印と三昧耶印の順番を三昧耶印・大印の逆とする説の信奉者も強力であり、時輪教はこの説に与する。両者の相互に手の内が分かった上での長い論争は、所謂「インド後期密教」論争史のハイライトの一つとなるものである<sup>1</sup>。

灌頂理論 *Sekanirdeśa* を含む主要なマイトリパの著作はこれまで大正大学の学者たちの共同研究で邦訳されている。彼の四大弟子 (*Sahajavajra, Devākaracandra, Rāmapāla, Vajrapāṇi*) の一人とされる *Rāmapāla* 作 *Sekanirdeśapañjikā* の詳細な校訂と英訳が2014年に *Harunaga Isaacson* と *Francesco Sferra* によって出版された。同書は *Sekanirdeśapañjikā* から視野の及ぶ限りの広範なマイトリパの学統に関する自他の研究成果に立つ。それは金剛乗独自の修習 (*bhāvanā*) 論を性瑜伽の局面に特化して、ヒンドゥー教諸派・仏教徒の諸派の見解を比較した内容となっている。同じく高弟ヴァジラパーニ<sup>2</sup> (b. 1017, 没年不明) 作 *Guruparamparakramopadeśa* (Toh 3716、以下 GPU) は、東北大学の磯田熙文によって、そのチベット語訳に基づく摘要が早くに提出されており (1978)、マイトリパの法流解明に重要な役割を果たしてきた<sup>3</sup>。

本稿は二つの目標をもつ。一つは、磯田の大局を把握した基礎研究とインド後期仏教研究の先頭を走る西洋の学者たちの精緻な研究成果から学べることを同学の士との共通理解とすることでインド金剛乗理解の向上を図ることである。二つ目は、ヴァジラパーニの主著 GPU の和訳を通して、「菩提心の漏」を当然の理とし、その漏の具体相と四歡喜説の関連に分け入るマイトリパの学統と金剛乗である限り貪欲行は必須としながらも、「菩提心の不漏」を最勝不壊の大樂現成の前提条件とする時輪教との修習論上の相違を明らかにする一助とすることである。本稿の構成は表題のとおり、第一部のヴァジラパーニを巡る宗教家たちの諸問題と第二部の GPU 和訳研究からなるものである。

## 第一部

### 1 『青冊史』「大印契の章」および『七教勅』に出るヴァジラパーニの事績

まず、マイトリパの法統にあるヴァジラパーニの位置と彼の活動内容をチベット人が記した歴史書『青冊史』から見ていく。

ドム〔トゥン〕(Brom ston pa rGyal ba'i 'byung gnas, 1005～1064) は尊者 (Atiśa) がチベットに来て 23 年後に逝去した。ほぼこの頃に大グルのドクミ ('Brog mi Shākya ye shes) も逝去された。ドクミの死後にインド人 Phyag-na (以下、Vajrapāṇi) がチベットへ来られ、蔵の高地で 21 人の偉い学者たちに 'Grub snying (Saraha の Dohākośa) の法などを広大にお説きになった<sup>4</sup>。

師匠マルパは、壬巳 (みずのえみ, 1012) に生まれたとされる。86 歳で辛丑 (かのとうし, 1097) まで生きた。(略) 彼が 31 歳の時、尊者 (Atiśa) がチベットへ来られた。ナクツォ訳経師と Khu-ston brTson 'grus gyung drung の二人は彼 (マルパ) より一歳年長であった。マルパが 6 歳の時、丁巳 (ひのとみ, 1017) にインド人の Phyag-na (Vajrapāṇi) が生まれた<sup>5</sup>。

Maitri-pa には多くの弟子がいたが、主要な人物は「四大弟子」「七人の中弟子」「十人の小弟子」であって、21 人として知られる。「四大弟子」とは Natekara, Devākaracandra, Rāmapāla, Vajrapāṇi の四人である。Natekara は外教徒の時の名前であって、後に lHan cig skyes pa'i rdo rje (Sahajavajra) [として知られる]。Devākaracandra は、その別名が sTong nyid ting nge 'dzin (Śūnyatāsamādhi) であり、*Prajñāñānaprakāśa* (Toh 2226) をお作りになったお方である<sup>6</sup>。Rāmapāla はチベット語で dGa' ba skyong ba であって、*Sekanirdeśapañjikā* (Toh 2253) をお作りになったお方 [である]。Phyag-na rdo rje (Vajrapāṇi) は Nam mkha' snying po (Ākāśagarbha) , Sa'i snying po (Kṣitigarbha) との三兄弟の末であったことから、Sa'i snying po の手引きで Maitri-pa の弟子にして欲しいと懇願した。Maitri-pa は喜んで自分と [Vajrapāṇi の] 手を布切れで結んで、正覚に至るまで離れないとの誓いをなした。Vajrapāṇi は丁巳 (ひのとみ, 1017) に生まれた。幼少期から理知に秀でて外教と仏教の学問すべてと秘密真言のタントラ部に広く通曉した。彼はとくに sNying po skor (Dohā の法統) の権威となった<sup>7</sup>。

ある者は、Karo-pa, Vajrapāṇi, Mar-pa, ネパール人 Śīlabharo たちについて「四精神子」とも呼んでいる。また Mahāmudrā の高地流派 (Phyag rgya chen po sTod lugs) の者たちは、チベットにおける Mahāmudrā の興起について初期・中期・後期の三つに分ける。初期の学統 (sNga ma skor) は、Nirū-pa から相伝する者たちである。中期は、高地と低地の二つ [からの相伝である]。高地の流伝 (sTod 'gyur) は Vajrapāṇi がチベットに来られて、大学者たちに説かれたものであるのに対して、低地の流伝 (sMad 'gyur) は、

Asu が生涯を衛 (dBus) で過ごして説かれたものである。後期の流伝 (Phyi 'gyur) は、mNga'ris 出身の Nag po Sher dad がインドへ行って、年老いた Vajrapāṇi の下へ到り、後にチベットへ戻ってお説きになったものである。尊者マルパに由来するものは、付加的な流伝 (zur 'gyur 傍流) とも言われる<sup>8</sup>。

また、以前インド人 Vajrapāṇi が修行に入ってネパールで乞食をしていた時に、ネパールで布教できるかどうかと思案して、できるだろうとお考えになった。後に、50歳になった時、Ye rang<sup>9</sup> に行つてそこで住された。〔Vajrapāṇi は〕 'Brog[mi] jo sras などのチベット人の学者たちと出会い、仏法を説いて欲しいと頼まれた<sup>10</sup>。〔Vajrapāṇi が伝授したその〕法は、付随する文献 (phra mo) を伴った Grub snying (Dohā の教説) の根本典籍、ならびに口訣の精髓に基づく 9 小編 (brul tsho) と父タントラに基づく 9 小編と母タントラに基づく 9 小編であり、全部で 27 編を羯磨印・法印・大印・三昧耶印の四印契で結びつけたもの〔である〕。さらに、〔Vajrapāṇi は法を〕口訣と教証に相応する見、体験と相応する観想、時と相応する行、利他と相応する果、内なる熱の徴と相応する道、教誡と相応する灌頂の六つの相応 (対応関係) をもつものとして説かれた。

根本典籍 Grub pa shes bdun (七部成就書) は、  
mTsho skyes (Padmavajra) の *Guhyasiddhi* (Toh 2217, Ota 3061 Tr. Kṛṣṇa paṇḍita, Tshul  
Khrims rgyal ba)

Yan lag med pa'i rdo rje (Anāṅgavajra) の *Prajñopāyavinīscayasiddhi* (Toh 2218, Ota 3062  
Tr. Śāntabhadra, 'Gos lhas btsas)

Indrabhūti の *Jñānasiddhi* (Toh 2219, Ota 3063 Tr. Nag tsho)

Lakṣmīkara の *Advayasiddhi* (Toh 2220, Ota 3064 Tr. om)

Ḍombiheruka の *Sahajasiddhi* (Toh 2223, Ota 3067 Tr. om)

Dārika-pa の *Guhyamahāguhyatattvopadeśa* (Toh 2221, Ota 3065 Tr. om)

瑜伽女 Tsi to (\*Cintā) がお作りになった *Vyaktabhāvanānugatatattvasiddhi* (Toh 2222, Ota  
3066 Tr. Śāntabhadra, 'Gos lhas btsas) などである。

精髓 (Nying po) は、王・妃・臣の三つの Dohā である。他に、Maitri-pa がお作りになった *Sekanirdeśa* (Toh 2252, Ota 3097) と Vajrapāṇi 本人の作である *Nairātmyparakāśa* (Toh 1308, Ota 2438) などの小編。

Sahajavajra がお作りになった *Tattvadaśaṭīkā* (Toh 2254, Ota 3099 Tr. Vajrapāṇi, Kalyāṇavarman, Jñānākara Mtshur) と *Sthitisamuccaya* (Toh 2227, Ota 3071 Tr. Dhiriśrījñāna, rMa ban Chos 'bar)。

Vajrapāṇi がお作りになった *Vajrapada* (Toh 2255, Ota 3100) と *Guruparamparakramopadeśa* (Toh 3716, Ota 4539)。

Devākaracandra がお作りになった *Prajñājñānaprakāśa* (Toh 2226, Ota 3070 Tr. Vajrapāṇi, Dharmakīrti)。

Rāmapāla がお作りになった *Sekanirdeśapañjikā* (Toh 2253, Ota 3098 Tr. Samantabhadra, Nag tsho)。

阿闍梨 Nāgārujna[garbha] がお作りになった *Caturmudrānvaya* (Toh 2225, Ota 3069 *Caturmudrānīścaya*) などが「小部集」として知られており、[Vajrapāṇi は] それらをお説きになった。

それから、'Brog[mi] jo sras が上師 Vajrapāṇi をチベットへ招請して、[Vajrapāṇi は] 蔵 (gTsang) の Chu sgo に住している間に、チベット人学者たちに Mahāmudrā の法を多くお説きになった。[Vajrapāṇi の] 弟子は、She sngon Byang 'bar, Zang snga Ring mo, Khams pa rGwa ston, sPu hrangs Nag po sher dad, 'Brog[mi] jo sras rDo rje 'bar, Or brgyad sTan chung, Klungs shod pa Khyung khri, Khyi'u brtson 'grus, Ba reg pa Thos pa dga', Brang ti Blo gros dbang, Bra'i 'Bum la 'bar, Brag pa, dKon grags, Se ston sGra gcin zin, mTsur 'dhyig gi rgyal mtshan たちであり、訳経師の弟子も Nag tsho Tshul khri ms rgyal ba, rMa ban Chos 'bar, gNyan Dharma grags, mChung Ye shes 'byung gnas の四人 [が知られている]。この弟子の数をさらに増やすとすれば、「三十人の学者たち」とも言われているのである<sup>11</sup>。

'Brog[mi] jo sras が Vajrapāṇi を [チベットへ] 招請した時、彼は黄金 80 srañ [の謝礼] を約束した。自分の父の葬儀執行の時に、彼は黄金 50 srañ を 80 srañ と偽って差し出したので、上師 Vajrapāṇi の弟子たちはその重さを測り、50 srañ しかない [と知った]。それに対して上師は失望して、「'Brog[mi] jo sras が私に嘘をつくのは良くない。そうならば、あの男の父親も死刑執行人ではなかろうか<sup>12</sup>。父親の行状は息子によって示されると言われる」と仰って、剃刀で自分の腹を切り裂いた。そこで従者たちは恐れ怯えて泣き出したので、[上師は]「汝らは心配してくれているのか。[私に] 何か難儀なことでもあると言うのか」[と仰って]、御手で [腹を] 叩くだけで痛みすらなくなってしまう、南のネパールへ立ち去られた<sup>13</sup>。

後に、彼 (dPyal Kun-dga' rdo rje) は、ネパールへ赴き、Ha-mu dkar po (本名 bSod nams byung gnas bzang po, 法名 Varendraruci) の下で六つの典籍をその加持も含めて聴聞した。しかし、Ha-mu は彼に特別な教誡は与えなかった。そこで、彼はさらに Ha-mu とその妻女に贈物を捧げて二人を喜ばせ、遂に 13 の特別な教誡も許可された。その時、インド人 Vajrapāṇi もまたネパールに住んでいたため、[Kun-dga' rdo rje は] 彼と sTong nyid Ting 'dzin (Devākara-candra) の二人を先生にしていた。[Kun-dga' rdo rje は] Vajrapāṇi はとても分限者 (sku bsod che ba) なので [多少の謝礼では十分ではないだろうから] 招請しないでおこうと思ひ、[代わりに] Devākara[candra] を招請したが、満足な謝礼すらもできなかった<sup>14</sup>。

Vajrapāṇi の弟子でカシミール人の「片眼」と呼ばれる Dharmasrī なる者も [チベット

への旅で] 上師に従って行った。彼は Mahāmudrā の学統を廣大に説いた。チベット人の学者たちと出会ってから、彼は、「中観の副註」(’Bu ma gyi tīkā)<sup>15</sup>と「概括の鍵」(sDud pa’i lde mig)<sup>16</sup>を書いた。さらに、Vajrapāṇi の弟子には、La stod gTsang shod pa, Sher sgom Dar seng, Jo btsun Me ’bar, Zang ded po lung pa, Go lung pa Grub thob btsun pa, mNga’ ris Char chung pa, La stod Na zlum pa, mKhan po (upādhyāya) sNyin po rgyal mtshan, mKhan po (upādhyāya) rGyal mtshan ’od, mKhan po (upādhyāya) Nam mkha’ rgyal mtshan, ’Jam dbyangs rin chen bzang po, Mi nyag Shes rab bzang po [が]いる。]。(略) このように、Phyag-na (Vajrapāṇi) の師弟から出た者たちについては Mahāmudrā の高地学派 (sTod lugs) として知られるのである<sup>17</sup>。

さらに、後期流伝 (phyi ’gyur) は、Vajrapāṇi が老いた時、mNga’ ris 出身の Nag po Sher dad が東インドで上師の下に住し、Mahāmudrā の 10 の法を聴聞した。[それらは] 大部と小部の Dohā (Toh 2224, Ota 3068 Saraha 作 *Dohākoṣagīti*, Toh 2263, Ota 3110 Saraha 作 *Dohākoṣacaryāgīti*) および *Kāyakoṣāmṛtavajra* (Toh 2269, Ota 3115 Saraha 作)、*Vāḷkoṣarucirasvaravajra* (Toh 2270, Ota 3116 Saraha 作)、*Cittakoṣājavajra* (Toh 2271, Ota 3117 Saraha 作)、*Kāyavākcittāmanasikāra* (Toh 2272, Ota 3118 Saraha 作)、*Bhāvanākramaṣaṭka* (Toh 2299, Ota 3148 Vajrapāṇi 作)、「臨終の教誡」(’ Chi kha ma’i gdams ngag)<sup>18</sup>、*Anāvilatantrarāja* (Toh 414, Ota 58) とその註釈書 (Toh 1204, Ota 2334 \*Kumārācandra 作 *Anāvilatantrarājapañjikā*) [である]。このお方 (Nag po sher dad) は ’Gos[lhas btas] 訳経師の弟子であった。後にこのお方は、gZung gru sna の背後に僧院を建立し lHa tsho で師匠になられた<sup>19</sup>。

以上の引用から、東インド・ネパール・チベットに広がるマイトリパ (アドヴァヤヴァジラ) の学統の伝播がヴァジラパーニの下に集ったインド亜大陸各地方出身者の人的繋がりで見られている。同書が彼のネパールに腰を据えた活動開始は 50 歳の時と明言していることから、これは 1066 年となる。50 歳以前の彼の活動について『青冊史』は詳しく語っていない。ネパールで彼は弟子たちと密に繋がった翻訳作業に関与をしているのは間違いないことから、’Brog[mi] jo sras に招請されたチベット行きは 50 歳以後の出来事となろう。

インド・チベット仏教交流史が語る所、チベットの地では、文化的優位性と宗教的権威をもち、自在に教説を祖述し紡ぎ出すインド人僧侶や成就者 (siddha) と呼ばれる瑜伽行者 (yogin) と彼らの庇護者・スポンサーとなったチベット人宗教家との間には法施と布施の名の下に、多額の金銭が動き、それに付随する様々な葛藤があった。チベット人からインド人宗教家の手に渡った莫大な黄金が最終的にはパーラ王朝の庇護の下でそれ自身も大土地所有者であった大僧院の栄華に資するものであったことも明らかになっている<sup>20</sup>。チベット人宗教家にとってインド人たちが身に纏う権威は俗に言う「商売の元手」となるものであった。それは先駆けて困り込み独占したい財である。『青冊史』

から、'Brog[mi] jo sras とヴァラパーニの間に何らかの世俗的・金銭的トラブルが生じてヴァラパーニがネパールへ去ったこと、そして、東インドの地に戻って晩年を送るヴァジラパーニの下へも「利は元にある」を実践する熱心なチベット人宗教家が訪れていたことを知る必要がある。

ここで、ターラナータ (Tāranātha Kun dga' snying po 1575~1635) 作『七教勅』の第一教勅から、マイトリパの学統と彼の「四大弟子」への言及を見ておく。

尊者 Nāropa が逝去して初めて、この阿闍梨本人 (Maitri-pa) の有情利益の事業が始まった。Maitrigupta の良い世評と彼の弟子たちを身元に集めていることは決して些細な事柄ではなく、Nāropa の業績に比肩するものであった。このお方は最上の人物として知られており、大なる利他をなす者であった。その当時、聖なる土地 (インド) には多くの信奉者が居たが、その後でその者たちは消滅してしまった。その教説はネパールとチベットといった [インド亜大陸の] 北方で大きく展開した。Maitri-pa の弟子たちについて昔のチベット人たちが語るところによると、「四大弟子」「七人の中弟子」「十人の小弟子」が居た。中弟子と小弟子たちの数はインド人たちの間であまりよく知られていなかったもので、その数の確かなことは分からない。一般的に言って、学識と威力を獲得した瑜伽行者の弟子たちはたくさん居たのである。その「四大弟子」は全員が有名であり、Sahajavajra, Śūnyatāsamādhi, Rāmapāla, Vajrapāṇi である。最初の人物は、Naṭegana として知られ、Tattvadaśakaṭikā (Toh 2254) と Sthitisamuccaya (Toh 2227) を作った。第二の人物は Devākaracandra と言われ、Prajñājñānaprakāśa (Toh 2226) を作った。第四 [の人物] は「インド人の御前」として知られていて、Vajrapada (Toh 2255) を作った。これらの三人は持金剛身を得ることはなかった。つぎに、Rāmapāla は dGa' ba skyong または dGa' byed skyong [の名で出る相承者] で Sekanirdeśapañjikā を作ったのはその学匠である。[Rāmapāla は] 威力を得た明妃で Rin chen lha mo (\*Ratnadevi) なる瑜伽女とは智慧と證得で同等であるとの世評であった。[また] Gangadhari の位の半ばを得たお方として有名であった<sup>21</sup>。このお方は、クシャトリアの種姓で南インドの Karnataka に生まれた。幼少から多くの学問分野に通暁し、勝者 Maitri-pa の下で 12 年間依止した。Maitri-pa が逝去してから dPal yon can (\*Śrīgunavat) の仏塔で三年間、上師の喪に服し、その間は一言も喋ることなく心一境性を成就して住された。そして、核心の意味のすべてが明瞭となってから南インドで一切有情の利益をなして住された<sup>22</sup>。

『アティシャ伝』によると、アティシャのチベットへの出立の間もなくナーローパ (Nāropa, 956~1040) は逝去している。『七教勅』はそれを機にしてマイトリパの表立った宗教活動が始まったと言う。ヴィクラマシーラ僧院でナーローパは、「法の依嘱」に類する言辞でアティシャを持ち上げる逸話<sup>23</sup>も『七教勅』が伝える成就者たちを取り巻く時代背景・状況を示唆するようである。

さて、マイトリパの「四大弟子」の取り扱いが『青冊史』と『七教勅』で大きく異なるのは興味深い。『青冊史』では、Sahajavajra, Devākaracandra (Śūnyatāsamādhi), Rāmapāla に比べてヴァジラパーニについての逸話は格段に多い。ところが『七教勅』では、彼についての記述は *Vajrapada* (『金剛句』) の作者としての紹介のみである。対照的にやや詳しい事績を出すのが Rāmapāla である。しかもターラナータは、Sahajavajra, Devākaracandra とヴァジラパーニの「この三人は持金剛位を得ていない」と書いている。その含意は、「四大弟子」の中で Rāmapāla だけが持金剛位を獲得したということになる。ヴァジラパーニの教線が東インドからチベットに至る亜大陸北方であるのに対して、Rāmapāla は主として出身地の南インドが活動範囲であった。さらに看過できないことは、ターラナータが瑜伽女 Rin chen lha mo (\*Ratnadevī) を明妃として、つまり Rāmapāla の宗教的実践のパートナーとして名を出していることである。これは、同じく師匠のマイトリパが Gaṅgādharā なる明妃と暮らしていたとの記述<sup>24</sup>と併せて考えるとインド金剛乘における在俗瑜伽行者のあり方を示唆する重要な証言となる。

## 2 ヴァジラパーニの関与が見られる西藏大蔵経の典籍

前章で見たヴァジラパーニの事績の抜粋には、彼の周囲に集まった多くの宗教家たちの名が出てくる。『七教勅』が記すヴァジラパーニの師匠マイトリパと兄弟弟子 Rāmapāla への言及も僧院に住する金剛乗の比丘とは対蹠的な在俗瑜伽行者（成就者）<sup>25</sup>のあり方を示唆する。これは筆者が論じてきたように、インド仏教金剛乗が僧院に住する金剛乗を信解する比丘の出家者を一方の焦点とし、遊行し、定住もする声望ある在俗瑜伽行者とそのパートナーの周りに集まる弟子集団・支援者たちからできる不定形なグループを他方の焦点とする楕円形の理念空間を再確認するものである。

そして問題は、後期インド仏教、具体的にはパーラ王朝の庇護下に壮麗な大伽藍の威容を誇った大僧院を中核とする大中小の寺院のネットワークに対して成就者の集団がどのように地続きであり、どのように包摂されていたかの具体相の解明である。長い歴史をもつ大乘（波羅蜜乘・経部大乘）経典 (sūtra) の成立問題については、聖典の伝統的な口唱の習慣に対して、新たな書写の導入が聖典（作成）制作と言う舞台を創出し、その過程が大乘の成立と表裏の関係にあると説く下田正弘の知見は、大乘の下部概念である金剛乗の聖典 (tantra) 作成の理解にも妥当である。さらに金剛乗の場合は、制作者の観念内容の表出が経典として成立し流布する段階から、タントラの註釈書、それと相応する儀軌・儀礼書（マニュアル）の作成、およびそれに基づく宗教実践・規範 (samaya) の遵守へと繋がる。この分野の解明には手付かずの課題が多い。そもそも、経部大乘に経師と論師があったとされるように、金剛乗も匿名を原則とする「タントラ師」（経師）と名を明かす「儀礼関連作成師」、「註釈師」（論師）たちの広義の役割分担があったのであろうか。あるいはまた、それらのテキストの全てが観念上の遊戯にとどまるものではない限り、比丘の場合、違逆方便となる三昧耶の実践の前には僧伽の規律（波羅提木叉）が立ちほだかるはずである。彼らはその矛盾した状況にどう対応したのか。具体的には、

彼らは金剛乗の信解者となるために必須となる性瑜伽を根幹にする上位の灌頂をいかなる場所で受けたのか。それが僧院内部であるはずはない。それならそれはどこなのか。

かつて筆者はマイトリパの僧院追放とそれに関与したとされるアティシャの逸話を追求した。そこで出した結論は、チベット人たちが好んだ逸話の真否に拘らず、酒色に関わる宗教実践は僧院の規律に反するとして、僧院内では金剛乗の比丘であっても許容できなかったことである。他方、在俗瑜伽行者の場合なら、酒色に関わる宗教実践に何の障害もなかったであろう。さらに『アティシャ伝』が語る最晩年のナーローパがヴィクラマシーラ大僧院を訪問した際、僧院挙げての歓迎を受けていることである。これは、かつて同僧院の学僧であったとされるナーローパへの特別な対応であろうか。これらは筆者が抱える喫緊な関心事である。

本題に戻って、チベット大蔵経の奥書からは、ヴァジラパーニが師匠マイトリパの多数の著作<sup>26</sup>のみならず、自身の著作、同門の *Sahajavajra*, *Devākaracandra*, *Rāmapāla* の著作、および他のインド人作の文献のチベット語翻訳に精力的に関わっていたことが分かる。本章では、ヴァジラパーニの翻訳活動を中心に、これら文献のチベット語訳に関与した訳経者とその文献をリストアップする。この作業を通して、本稿の主役であるヴァジラパーニが時輪教に繋がるヴァジラパーニと全くの別人であることの傍証が出る。つまり利害得失を知り、喜怒哀楽を表す逸話をもち、師匠マイトリパの教説を多くの訳経師や弟子たちとの翻訳協業を通じて広宣流布した事蹟から、前者のヴァジラパーニがインド・チベット仏教史において目鼻立ちを備えた実在の人物であることの証明となろう。他方で、『青冊史』「時輪の章」において、『チャクラサンヴァラタントラ』の註釈書 (*Laghutantraṭīkā*) の著者」として名が出る後者のヴァジラパーニは、時輪教の関係者たちが言及し、あるいは彼らの「時輪史」に見られる名称<sup>27</sup>である。

最後に、以下に出すヴァジラパーニが関与した文献のリストは、『西藏大蔵経総目録』(Toh) および『影印北京版西藏大蔵経』(Ota) の枠組みに基づいて作成している。それに大正大学密教聖典研究会が校訂・和訳したマイトリパ (アドヴァヤヴァジラ) の対応する著作を出す。

### 1) Nag tsho Tshur khriṃs rgyal ba との協業

ナクツォ訳経師 (Nag tsho Tshul khriṃs rgyal ba, 1011~1064?)<sup>28</sup> も『青冊史』でヴァジラパーニと関係する「四人の訳経師」に挙げられる人物である。東インドのヴィクラマシーラ僧院の真言阿闍梨アティシャ (982~1054) のチベット招請に尽力し、チベット巡錫の師匠に死の前年まで 19 年間も仕えた人物としてナクツォの名はチベット仏教史に不滅である。しかし一方で、*Rāmapāla* 作 *Sekanirdeśapañjikā* を校訂出版した現代サンスクリット学の高所にいる学者たちには、ナクツォの翻訳者としての力量について「並」以上の評価はどこにも見られない。その一部を以下に紹介する。



おそらく [Nag tsho] Tshul khrim s rgyal ba は、Dīpaṅkaraśrījñāna をチベットへ連れてくるためにインドへ送られたチベット人として、かのインド人の師匠の弟子として、師匠の数多い著作の共訳者として最も有名である。また彼はここで見るように他のインド人学匠と協業もしている。(中略) しかしながら、*Sekanirdeśapañjikā* と彼のそのチベット語訳の検討から、我々は、彼についてチベット人訳経師の中で特別に優れたランクづけをする気にはならない<sup>29</sup>。

要するに他の研究者の意見も参考にした上で、Issacson と Sferra は、ナクツォの翻訳技能に関しては、彼が長期に亘って仕えたアティシャの著作の場合と比べて、他のインド人学匠たちの著作の翻訳はそれより劣ると見ているようである。*Rāmapāla* の *Sekanirdeśapañjikā* はまさしく後者の場合である。

一方、筆者のナクツォ訳経師への尽きない興味は、彼が東インドの仏教大僧院に暫く止住し、僧院の日常生活・雰囲気、その聖と俗を間違いなく経験したであろうこと、プラハリ (Phullahari) の地で高名な瑜伽行者ナローパを目撃し、また老いたナローパがヴィクラマシーラ僧院を訪れ、アティシャも含めた長老たちから歓迎を受けた現場の近くにいたであろうことなど、彼が十一世紀初頭における僧院内外に跨るインド仏教金剛乗の深さと広がり、聖と俗の実際を見聞した人物であることから来る。ナクツォはドムトゥンやマルパ (Mar pa Chos kyi blo gros, 1012-1097) のように宗派を創立する構えを見せてはいない。人物的には訳経師で終始し、高僧・学匠からの法の伝授を最優先するナクツォにとっては、東インド・ネパール・チベットで遭遇した著名な学匠・瑜伽行者たちは彩の異なる善知識であるに過ぎなかったのではないか。筆者が問題にする金剛乗世界の構造解明にとっては最適のインフォーマントであるにも拘らず、今日的な視点で平たく言えば、彼は「伝授オタク」の一面をもつ人物であったと言えるかも知れない。これも無数の人間類型の一つではある。しかし、この地点からの「ナクツォ訳経師における人間研究」は文学においてのみ許される領分となろう。彼の業績については内外の優れた研究がなされている<sup>30</sup>。

ナクツォ訳経師は 1017 年生まれのヴァジラパーニより六歳年上である。彼の逝去は 1064 年とするのが最近の定説である<sup>31</sup>。ヴァジラパーニがネパールの Ye rang に住むのは 50 歳と『青冊史』は明記する。これは 1066 年である。そうだとすれば、ヴァジラパーニのネパールでの本格的活動の数年前にナクツォは既に世を去っていることになる。また 27 歳のナクツォがアティシャ招請のために二回目のインドへ向かうのが 1037 年である。この年にヴァジラパーニは未だ 20 歳であることも考慮に入れる必要がある。アティシャの西藏巡錫の根回しと準備に費やされたヴィクラマシーラ僧院滞在中にヴァジラパーニとの接触は考えられない。さらに、1030 年代初めにあったナクツォの第一回目のインド滞在中ではヴァジラパーニはまだ若く翻訳協業の可能性は低い。それでは、ナクツォは、数多いヴァジラパーニとの翻訳作業をどこでしたのであろうか。『青冊史』の記述にあるように、病床にあるアティシャの看護から自由になったナクツォが、カ

シミール人学匠 Jñānakāra から念願の『秘密集会』聖者流の伝授を受けるためにネパールの彼の下へ急行した (1053) のは間違いないであろう<sup>32</sup>。この時点からナクツォは没年の 1064 年までの約 10 年間にヴァジラパーニを含むインド人阿闍梨たち (Śāntibhadra, Kṛṣṇasamayavajra etc.) と数多くの翻訳を集中的に行ったと考えられる。ヴァジラパーニが 1066 年以前にもネパールに来て将来の宗教活動の可能性を探っていたことは『青冊史』から明らかである。それでも、彼の本格的なネパールでの活動開始 (1066) の前にナクツォが没しているのは気になるところである。以下に見るナクツォとヴァジラパーニの協業した訳経がマイトリバの著作 7 本とヴァジラパーニの 1 本に限られていることは、その協業に限られた期間の集中したものである可能性も示唆する。

### 西藏大蔵経における翻訳文献名一覧

Toh 2230, Ota 3074 *Madhyamaṣaṭka* (中道六偈) 密教聖典研究会 no.13, pp.(86)~(90)

A. [D] Maitri (Advayavajra) , [P] Metri

Tr. Vajrapāṇi, Nag tsho

Toh 2233, Ota 3077 *Svapnanirdeśa* (夢説示) 密教聖典研究会 no.13, pp.(68)~(71)

A. gNyas med rdo rje (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, Nag tsho Tshur khriṃs rgyal

Toh 2234, Ota 3078 *Māyānirukti* (幻説示) 密教聖典研究会 no.12, pp.(52)~(55)

A. gNyas med rdo rje (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, Nag tsho Tshur khriṃs rgyal

Toh 2235, Ota 3079 *Apratiṣṭhānaprakāśa* (無住処明説) 密教聖典研究会 no.13, pp.(79)~(81)

A. gNyas med rdo rje (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, Nag tsho Tshur khriṃs rgyal

Toh 2237, Ota 3081 *Yuganaddhaprakāśa* (双入明説) 密教聖典研究会 no.12, pp.(56)~(59)

A. [D] gNyas med pa'i rdo rje (Advayavajra) , [P] Avadhūti (Advayavajra)

Tr. [P] Vajrapāṇi, Nag tsho, [D] Vajrapāṇi, rMa ban Chos 'bar,

Toh 2238, Ota 3083 *Nirbhedapañcaka* (決択五偈) 密教聖典研究会 no.13, pp.(82)~(85)

A. gNyas med pa'i rdo rje (Advayavajra)

Tr. [D] Vajrapāṇi, Nag tsho Tshur khriṃs rgyal ba, [P] Vajrapāṇi, rMa ban

Toh 2295, Ota 3143 *Caturmudropadeśa* (四印契教誡) [Isacson and Sferra:385~398]

A. gNyas med rdo rje (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, Tshur khrim s rgyal ba

Toh 2299, Ota 3148 *Bhāvanākramaṣaṭaka* (観想六次第)

A. Vajrapāṇi

Tr. Nag tsho

## 2) rMa ban Chos 'bar との協業

rMa ban Chos 'bar<sup>33</sup> は、『青冊史』にヴァジラパーニと関係する「四人の訳経師」の筆頭に挙げられる人物であり、同書のある箇所では、チベット語文法学の祖 *Thong mi sambhoṭa* の転生者とされていたことが記されている。「[ヴァジラパーニは] 後に、50歳になった時、*Ye rang* に行って、そこで住された」との同書の記述から、その1066年に rMa ban Chos 'bar は22 (or 23) 歳であったことになる。

その時代が過ぎて、*Srong btsan* [sgam po] は小カーラチャクラ [パーダ] の弟子のカシミール人 *dGon pa ba* と言われ、カシミール人の学者と言われる実名 *Jayānanda* に転生した。*Thong mi* [Sambhoṭa] は、南 *La stod* で rMa 訳経師 Chos 'bar に転生した。王女 (*Kong jo*) は南 *Pha drug* で *Ma gcig za ma* に転生したのである。rMa 訳経師は南のネパールで多くの学匠と出会っていた。このお方はインド人 *Vajrapāṇi* の弟子でもあった<sup>34</sup>。

マルパが33歳の甲申(1044)に rMa ban Chos 'bar がお生まれになった<sup>35</sup>。

rMa ban Chos 'bar は、以下のように多くのアドヴァヤヴァジラの著作の翻訳をヴァジラパーニと行っている。他にも *Nāgārujnagarbha* 作 *Caturmudrānvaya* (Toh 2225, Ota 3069 *Caturmudrāniścaya*)、*Sahajavajra* 作 *Sthitisamāsa*, (Toh 2227, Ota 3071 *Sthitisamuccaya*) をインド人学匠 *Dhiriśrījñāna* と翻訳している。

## 西藏大蔵経における翻訳文献名一覧

Toh 1249, Ota 2378 *śrī-Hevajrasādhana* (吉祥へーヴァジラ成就法)

A. Yan lag med pa'i rdo rje (Anāṅgavajra)

Tr. Vajrapāṇi, rMa ban Chos 'bar

Toh 1487, Ota 2203 *śrī-Cakrasaṃvarapratīṣṭhā* (吉祥チャクラサンヴァラ善住式)

A. gNyis med rdo rje (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, rMa ban Chos 'bar

Toh 2237, Ota 3081 *Yuganaddhaprakāśa* (双入明説) 密教聖典研究会 no.12, pp.(56)~(59)

A. [D] gNyas su med pa'i rdo rje (Advayavajra) , [P] Avadhūti (Advayavajra)  
Tr. [D] Vajrapāṇi, rMa ban Chos 'bar, [P] Vajrapāṇi, Nag tsho

Toh 2238, Ota 3083 *Nirbhedapañcaka* (決択五偈)

A. [D] gNyas su med pa'i rdo rje (Advayavajra) , [P] Maitri-pa (Advayavajra)  
Tr. [P] Vajrapāṇi, rMa ban, [D] Vajrapāṇi, Nag tsho Tshur khriṃs rgyal ba

Toh 2239, Ota 3084 *Mahāsukhaprakāśa* (大樂明説) 密教聖典研究会 no.12, pp.(60)~(65)

A. gNyas su med pa'i rdo rje (Advayavajra)  
Tr. Vajrapāṇi, rMa ban

Toh 2240, Ota 3085 *Tattvaratnāvalī* (真性宝鬘) [宇井: 1~52]

A. gNyas med rdo rje (Advayavajra)  
Tr. [D] Phyag-na rdo rje (Vajrapāṇi) , rMa ban Chos 'bar<sup>36</sup>, [P] Tshur khriṃs rgyal ba

Toh 2241, Ota 3086 *Tattvaparakāśa* (真性明説) 密教聖典研究会 no.13, pp.(72)~(77)

A. gNyas med rdo rje (Advayavajra)  
Tr. [D] om, [P] Vajrapāṇi, rMa ban Chos 'bar

Toh 2242, Ota 3087 *Tathāgatapañcamudrāvivarāṇa* (五如来印契釈) 密教聖典研究会 no.10,  
pp.(46)~(57)

A. gNyas med rdo rje (Advayavajra)  
Tr. Phyag-na rdo rje (Vajrapāṇi) , rMa ban Chos 'bar

Toh 2277, Ota 3124 *Bhāvasaṅcara* (有行)

A. Klu sgrub (Nāgārjuna)  
Tr. Vajrapāṇi, rMa ban Chos 'bar

Toh 2297, Ota 3145 *Abodhabodhaka* (不覺覺作)

A. gNyas med rdo rje (Advayavajra)  
Tr. Vajrapāṇi, rMa ban Chos 'bar

Toh 2298, Ota 3146 *Sarvasārasamuccayaprakaraṇa* (心髓集論)

A. [D] gNyas med rdo rje (Advayavajra) , [P] Ānandavajra  
Tr. Vajrapāṇi, rMa ban Chos 'bar

Ota 3082 *Prīṇapañcaka* (五入歡喜) , Toh om

A. Maitri-pa (Advayavajra)

Tr. Phyag-na (Vajrapāṇi) , rMa ban

### 3) mTshur ston Jñānākara (Ye shes 'byung gnas) との協業

死の床にあるアティシャを離れてまでナクツォが聴聞を望んだカシミール人の学匠と同じインド名をもつこのチベット人訳経師については、西藏大蔵経にヴァジラパーニおよびその弟子 Kalyāṇavarman との協業の成果が残されているだけである。Vajrapada の奥書に出る肩書きは比丘である。彼は、ナクツォや次に述べる Chos kyi shes rab のように多くのインド人学匠に就くことなく、ヴァジラパーニだけのサークルに関わった人物と思われる。

#### 西藏大蔵経における翻訳文献名一覧

Toh 1308, Ota 2438 *Nairātmyaparakāśa* (無我母明)

A. gNysis med rdo rje (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, Jñānākara

Toh 1576, Ota 2284 *dPal-rDo rje rnal 'byor ma'i dgongs pa'i sbyin sreg gi cho ga* (\*Vajrayoginy-abhipretahomavidhi 吉祥金剛瑜伽母密意護摩儀軌)

A. Kongka byin (\*Koṅkadatta)

Tr. Vajrapāṇi, mTshur Jñānākara

Toh 2229, Ota 3073 *Kudrṣṭinirghātanaṭīkā* (悪見除滅) 密教聖典研究会 no.10, pp.(10)~(37)

A. gNysis med rdo rje (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, mTshur ston Ye shes 'byung gnas

Toh 2231, Ota 3075 *Kudrṣṭinirghātaṭīkā*, (悪見除滅難語釈) 密教聖典研究会 no.10, pp.(38)~(41)

A. gNysis su med pa (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, mTshur

Toh 2232, Ota 3076 *Sahajaṣaṭka* (俱生六偈) 密教聖典研究会 no.11, pp.(144)~(145)

A. Maitri-pa (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, mTshur

Toh 2236, Ota 3080 *Tattvadaśaka* (真性十偈) 密教聖典研究会 no.13, pp.(92)~(95)

A. gNysis su med pa'i rdo rje (Advayavajra)

Tr. Phyag-na (Vajrapāṇi) , mTshur

Toh 2243, Ota 3088 *Sekatātparyasaṃgraha* (灌頂主旨綱要) 密教聖典研究会 no.11, pp.(108)~(121)

A. gNyis su med pa'i rdo rje (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, mTshur Jñānākara

Toh 2244, Ota 3089 *Samkṣiptasekaprakriyā* (灌頂作法略撰)

A. gNyis su med pa'i rdo rje (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, mTshur Jñānākara

Toh 2245, Ota 3090 *Pañcasvabhāva* (五自性) 密教聖典研究会 no.11, pp.(122)~(135)

A. gNyis su med pa'i rdo rje (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, mTshur Jñānākara

Toh 2246, Ota 3091 *Prajñopāyagrīdāpañca* (方便智慧遊戯五偈) 密教聖典研究会 no.12, pp.(80)~(83) *Premapañcaka*

A. gNyis su med pa'i rdo rje (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, mTshur Jñānākara

Toh 2254, Ota3099 *Tattvadaśakaṭikā* (十真性広釈)

A. lHan cig skyes pa'i rdo rje (Sahajavajra)

Tr. Vajrapāṇi, Kalyāṇavarman, Jñānākara mTshur

Toh 2255, Ota 3100 *Vajrapada* (金剛句)

A. Vajrapāṇi

Tr. Vajrapāṇi, Jñānākara

#### 4) 'Brog mi jo sras との協業

[Stearn: 213fn39] は、チベット人宗教家のいくつかの書物から、「大グルのドクミ」の妻子について以下のように纏めている。

lHa lcam gcig (本名 mDzes ldan 'od chags) はドクミの正妻であった。彼女は lHa rtse を支配する三人の王族の年長者 dPal lde の娘であった。つまり古いチベットの王族の家系であった<sup>37</sup>。彼女の両親は、ドクミがインドから帰国の直後に二人に授けた多くの灌頂に対する謝礼の祝賀の間に彼女を妻として与えた。彼女は jñānadākinī であり、Zha ma 派の伝承では、ドクミの二度目のインドへの旅に同行した。二人はその後の生涯を連れ添った。(ある書物では) mDzes ldan 'od chags はドクミより前に 65 歳で逝去した。しかし(別な書物では)彼女はドクミの死に伴い親族や弟子たちが三昧

耶に違犯した結果として、夫より後に死んだと言われる。ドクミの息子たちについては殆ど知られていない。(ある書物は) Jo sras Ye shes rdo rje および Tsad tsa Ye shes rdo rje として〔弟の〕rDo rje に言及する。彼は父と同じく訳経師であり、学匠 Vajrapāṇi をチベットへ招請した。また彼はいくつかの翻訳もしている。Bcom ldan Rig pa'i ral gri (1227~1305) によれば、Jo sras rDo rje は Snying po'i skor として知られる一連の典籍の翻訳を準備していた。彼のものと確実に同定できる唯一の現存する翻訳は、インド人の阿闍梨 Dhīrīśrījñāna との協業による *Bla ma brgyud pa'i rim pa'i man ngag* である。父親の死後まもなく、rDo rje は彼の兄 Indra の悲惨な死を聞いた直後に若くして死亡した(後略)。

この引用を史的事実と認めるならば、そして既述の『青冊史』からの引用と付き合わせると、ヴァジラパーニの事績にいくらかの肉づけが期待できる。まず、大蔵経奥書に出る 'Brog mi jo sras の本名が分かる。彼の父はインド人 Gayadhara との協業で多くの母タントラの翻訳を残したドクミである。ドクミは「強欲な」宗教家としても知られており、カギユ派の祖マルパや訳経師 'Gos lhas btsas と浅からぬ因縁をもったと言われる<sup>38</sup>。[Stearn: 194fn263] では、ドクミの没年は書物の著者ごとに、1077 (85 歳)、1061 (69 歳)、1074 (82 歳) or 1087 (95 歳)、1066 (74 歳) と諸説があって定かではない<sup>39</sup>。『青冊史』は、ドクミの死去は、カダム派の開祖ドムトゥンの逝去 (1064) の頃と述べ、さらにヴァジラパーニのネパール居住 (1066) と繋げている。'Brog mi jo sras が『青冊史』に出るヴァジラパーニをチベットへ招請した 'Brog[mi] jo sras rDo rje 'bar と同一人物だとすると、新たに追求すべき問題が生じる。『青冊史』の逸話にある 'Brog[mi] jo sras rDo rje 'bar の「父の葬儀執行の時」とは、まさに「大グルのドクミ」の葬儀を意味するであろう。上記の引用では、Brog mi jo sras rDo rje 'bar はドクミの死後まもなく、兄の死に時を置かず若くして亡くなったとも言う。以上の事柄を念頭に置いた上で、ヴァジラパーニがネパールの Ye rang に居住したのは 1066 年である。そして彼は「'Brog[mi] jo sras などのチベット人の学者たちと出会い、仏法を説いて欲しいと頼まれた」。このようにドクミの没年の問題も絡んでヴァジラパーニを巡るチベット人宗教家たちの活動の記述は錯綜している。

ここで留意すべきは GPU の翻訳協業がヴァジラパーニ本人ではなく、彼の弟子 Dhīrīśrījñāna と行われたことである。この点に注意することで、ヴァジラパーニのネパール居住年 (1066) との直接の繋がりとは外される。『青冊史』の二つの記述 (ドクミの逝去年および 'Brog[mi] jo sras とヴァジラパーニの金銭トラブル) に信を置くとすれば、ヴァジラパーニのチベット招請はドクミの葬儀より以前となる。Dhīrīśrījñāna の事績が分からない限り Brog mi jo sras rDo rje 'bar との GPU 翻訳は疑問のままに残る。今後の研究の進展が望まれるところである。

#### 西藏大蔵経における翻訳文献名

Toh 3716, Ota 4539, Nar 2534 *Guruparamparakramopadeśa* (GPU, 上師相承次第口訣)

A. Vajrapāṇi

Tr. [D] Dhiroṣki jñāna, 'Brog mi jo sras, [P] rDiroṣkri jñānapāda, 'Brog mi jo sras

5) Chos kyi shes rab との協業

比丘 Chos kyi shes rab<sup>40</sup> の名は、西藏大蔵経において中観・般若・書簡・讃嘆およびタントラの幅広いカテゴリーに現れる。協業者であるインド人学匠の名と協業の回数は次の通りである。Vinayacandra (13)、Suvajra (11)、Kṛṣṇa (10)、Buddhākaravarman (5)、Vajrapāṇi (4)、Dulo-pa (3)、Tāraśrimitra (2)、Kanaśrī (1)、Munīndrabhadra (1)、Śāntibhadra (1)、Vinayadeva (1)、Śradhākarabhadra (1)、Mañjuśrīvarman (1)、Adulo-pa (1)、Dul-ba'i lha (1)。

この訳経師はヴァジラパーニと翻訳協業はしているが、その典籍にマイトリパの作品はない。彼の事績についての情報不足から、翻訳者 Chos kyi shes rab の活躍年代は逆にヴァジラパーニの事績から、おおよそ十一世紀中葉と推測できる程度である。ここでは、翻訳協業者の一人 Kanaśrī とヴァジラパーニの名前が出る『青冊史』の箇所を引用しておく。

(Yar 'brog bla do の一族に生まれた Mar-pa Do-pa) は、ネパールでマルパに出会い、インドでは Tirahuti の地で Nāro-pa に拜顔できた) その後、Magadha に赴いた。[Mar-pa] lHo brag pa (マルパ) の助言どおりに Nāro-pa の弟子 Manakaśrī, Prajñārakṣita, カシミール人 Byang chub bzang po (\* Bodhibhadra), Pramudavajra (*em* Pramuditāvajra) たちに Nāro-pa の法規のサンヴァラの灌頂とタントラと口訣などをよく聴聞した。他の学匠たちにも多くの法を聴聞した。後に、ネパールに戻って、Pham thing-pa とその弟 Nag gi dbang phyug とネパール人 Kanaśrī たちに Nāro-pa の法規をよく聴聞した。[Mar-pa Do-pa はさらに] Maitri-pa の直弟子でネパールに住んでいた Phyang-na (Vajrapāṇi) にも多くの法を聴聞した<sup>41</sup>。

西藏大蔵経における翻訳文献名一覧

Toh 1496, Ota 2211 *Caryāgīti* (行歌)

A. Mar me mdzad ye shes (Atiśa)

Tr. Vajrapāṇi, Chos kyi shes rab

Toh 1963, Ota 2826 *Kṣīrasādhana* (乳成就法)

A. Jimuṭapātāla (Jimudrapāda)

Tr. Vajrapāṇi, Chos kyi shes rab

Ota 330 *ārya-Maitrinapratijñā-nāma-dhāraṇī* (聖慈氏菩薩發願陀羅尼), Toh om

Tr. Vajrapāṇi, Chos kyi shes rab



## 6) その他の訳経者との協業

Toh 1484, Ota 2201 *śrī-Cakrasaṃvarasādhana ratnapradīpa* (吉祥チャクラサンヴァラ成就  
法宝法灯)

A. Maitri-pa (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, Ba reg thos pa dga'<sup>42</sup>

Toh 1542, Ota 2287 *Vajravārāhīsādhana* (金剛亥母成就法)

A. gNyi su med pa'i rdo rje (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, mThur ston dbang<sup>43</sup>

Toh 2226, Ota 3070 *Prajñājñānaprakāśa* (般若智慧明説)

A. Devākaracandra<sup>44</sup>

Tr. Vajrapāṇi, Dharmakīrti<sup>45</sup>

Toh 2249, Ota 3094 *Amanasikārodeśa* (不作意説示) 密教聖典研究会 no.11, pp.(136)~(143)

A. gNyi med rdo rje (Advayavajra)

Tr. Vajrapāṇi, gNyan chung<sup>46</sup>

Toh 2533, Ota 3356 *ārya-Nāmasaṃgītiṭīkā-nāmamantrārthāvalokinī* (聖名等誦広積名号秘密  
真言義觀察)

A. sGeg pa'i rdo rje (\*Lāsyavajra)

Tr. Smṛtijñānakīrti, Rev. Phyag-na rdo rje (Vajrapāṇi) , Klog skya Shes rab brtsegs

Toh 3820, Ota 5219 *Bhagavatīprajñāpāramitāhṛdayaṭīkāṛthapradīpa* (仏母般若波羅蜜多心  
[経] 註・義灯<sup>47</sup>)

A. Phyag-na rdo rje (Vajrapāṇi)

Tr. Phyag-na rdo rje (Vajrapāṇi) , Seng ge rgyal mtshan

## 小結

インド仏教のチベット伝播は、幾世紀にもわたる文化交流史であり、社会的には、権威をもって文化的上位にたつインド人学匠・阿闍梨からチベット人宗教家への法の伝授は、対価として金銭・物品とサービスの逆方向への流れを意味している<sup>48</sup>。本稿が取り上げたヴァジラパーニの布教活動は、[Davidson 2004] が唱える「チベット・ルネッサンス」の現場を現す一断面であろう。錯綜した『青冊史』の記述からは、実に多くの宗教家が行き交って作り出す人間模様が浮かび上がる。僧侶身分であったアティシヤやシャーキャシュリーバドラと同様に、瑜伽行者ヴァジラパーニのチベット訪問の場合も、彼を中心として弟子たちが集団で行動していることが分かる。それは招請するチベ

ット人宗教家には大きな経済的負担だったであろう。インド人学匠の「困り込み」を巡る宗教家たちの確執も見られた。「上求菩提下化衆生」の理念<sup>49</sup>は脇に置くと、チベット人宗教家の負担や献身は、張り合う同業者に対する自らの宗教的・世俗的な権威向上の意図が裏張りされており、彼らが投下した資本が生み出す経済的利益を切に願ったとしても不思議ではない。

また、『青冊史』から、インドとチベットの間に位置するネパールは、彷徨し居住もする宗教家たちにとっての「人間交差点」であったことが改めて確認させられる。マイトリパの四大弟子のヴァジラパーニと Devākaraçandra の二人の活動範囲がネパールで地域的に重なる場面が見られることも分かった。ヴァジラパーニなどの在俗瑜伽行者の場合、東インド・ベンガル地方からネパールに跨る広い地域に財力のある信者の生活空間に、弟子、信解者・外護者が集まり、時には同類の瑜伽行者が相互に訪問して、その場所がセツルメント<sup>50</sup>となり、それらのネットワークが機能していたと考えてよい。そうした住居で行われた布教の内実が、ヴァジラパーニの場合は第一に、師匠・兄弟弟子を含むインド伝来の典籍のチベット語翻訳での協業であったと筆者は理解している。

僧伽に属する出家者の場合には、東インドにおける大伽藍で荘厳された大僧院 (Nālandā, Vikramaśīla, Odantapuri, Jagaddala etc.) を核とし、それと繋がる群小の中小寺院からなるコミュニティ (四方僧伽) が存在していた。この在俗瑜伽行者の活動空間と僧侶たちの世界が不定形な形で繋がった総体が後期インド仏教世界であり、それが存在していたことの一つの証が、死期を悟ったナーローパのヴィクラマシーラ僧院訪問と上座たち挙げての歓迎の逸話であろう。それはまた、遙か離れた雪山の国で、後ろ盾のない者には過酷な環境の下で辛酸を舐める有為の青年ドムトゥンに届いた希望の姿であった<sup>51</sup>。

布教に先立つ「市場調査」に関して、在俗瑜伽行者の場合は、とくに事前調査が必須であったはずである。「修行に入ってネパールで乞食をしていた時に、ネパールで布教できるかどうかと思案」したヴァジラパーニが好例である。在俗瑜伽行者の生活様式・活動スタイルが出家者との対比で社会学的な興味を惹起する。当初は mNga' ris 王国の王族に懇願された受け身の入蔵であり、その上ヴィクラマシーラ僧院の上座から滞在期間を三年と限られていたアティシャをここで引き合いに出すのは酷であるが、彼が出身の大衆部の摩訶僧祇律に基づく僧伽設立を意図して、あるいは無上瑜伽階梯のコアの部分を説示しようとして、ドムトゥンに諫められ深く失望したとの逸話は留意されるべきである。

最後に、「大きな物語」としての金剛乗は、人的には僧院に属する出家者と在俗瑜伽行者というアイデンティティを異にする類型からなっていたが、両者は全く無関係に存在していたわけではないと言えるだけの歴史と広がりをもっていた。この具体相の解明は優れて今日的な思想的課題である。

## 第二部

### 『上師相承次第口訣』（*Guruparaṃparakramopadeśa*, GPU）和訳研究

#### はじめに

GPUはヴァジラパーニの主著と言える文献である。彼の師匠マイトリパはインド仏教教義綱要書を意図したであろう *Tattvaratnāvalī* の末尾において、「然し真言理趣は余りに甚深であるからと、また甚深の理趣を信解し得る人々のみの対象たるものであるからと、更にまた四種印契等の修法の説明が詳しいからとで、我々はここにはそれを説かない。（中略）然し、これについては、我々は灌頂決定論（*Sekanirdeśa*）という論を制作した」<sup>52</sup>と述べるに止めている。従って、*Tattvaratnāvalī* 自体はインド仏教全体をカバーする著作とはなっていない。ヴァジラパーニは師匠が筆を置いた地点からさらに金剛乗の見解を廣大に述べて、師匠の大印契説を展開している。その意味で、GPUはインド仏教の教義全体を網羅した綱要書の名に恥じない典籍である。

同書のチベット語訳に関わったインド人学匠（DではDhiroṣki jñāna、PではrDiroṣkri jñānapāda）はDhiriśrījñānaである。彼は*Caturmudrānvaya*、*Sthitisamuccaya*、*Avadhūtipa*（*Advayavajra*）作 *Dohanidhi-nāma-tattvopadeśa*（Toh 2247, Ota 3092）、*Advayavajra* 作 *Tattvamahāyānaviṣṭi*（Toh 2250, Ota 3095）、Śāntideva 作 *Sahajagīti*（Toh 2341, Ota 3169）の翻訳に携わっている。チベット語訳者 'Brog mi jo sras については上述している。

#### 1 GPU 科文（次号）

#### 2 GPU 金剛乗の部テキスト・和訳（その1）

##### 凡例

1. チベット語のローマナイズ表記は Wylie 方式を用いる。
2. 西藏大蔵経のテキストはデルゲ版 (Tsu.164b2-183a5) を底本とし北京版 (Nu.184b3-206b4)・ナルタン版 (Nu.185a-207b) と校合した。
3. 読者の便宜を図るため、版本である中華西藏大蔵経の頁番号も使用する (Ch446~493)。
4. チベット語テキストの表記はつぎのように記す。  
例) デルゲ版 1187 Ga 帙 161 表葉 1 行目から裏葉 3 行目 → Toh 1187 Ga.161a1-b3.
5. テキストで異読が複数の語に渡る場合は始まりの語の前に \* を付す。
6. 和訳に際しては、翻訳上補った語句は [ ] に入れ、説明語句は ( ) に入れて示す。

##### テキスト

#### 果〔乗〕である金剛乗におけるタントラの三区

(D169b5) (P190b5) (N191a6) (Ch460) de nas gzhan yang 'bras bu rdo rje'i theg pa brjod par bya ste / de yang 'di skad du /

don gcig na yang ma rmongs dang // thabs mang dka' ba med pa dang //  
dbang po rnon po'i dbang byas pas // sngags kyi theg pa khyad par 'phags //

zhes gsungs pas don de kho na nyid la dbye ba med kyang pha rol tu phyin pa'i theg pa ni  
rmongs pa ste / lung (N191b) dang rigs(PN rig) pas gtan la phab ste rtogs pa'o // rdo rje theg pa  
ni ma rmongs pa ste / lung dang rigs(PN rig) pa dang / bla ma'i man ngag gyis nyams su myong  
ba'o // gzhan yang dka' ba med pa ste / bde ba chen po lam du byed pa'o // pha rol tu phyin pa'i  
theg pa ni btang snyoms pa (P191a) dang nyams su myong ba (D170a) med pa'o // rgyu lam du  
byed pas na rgyu'i theg pa'o // 'bras bu lam du byed pas na 'bras bu'i theg pa khyad du 'phags so  
// rdo rje theg pa la yang gsum ste / rgyu'i rgyud dang / thabs kyi rgyud dang / 'bras bu'i rgyud  
do // de yang 'di skad du /

rgyud ces bya ba rgyun yin te // rgyud kyi don ni gsum yin te //  
rgyu dang rang bzhin 'bras bu dang // thabs dang rnam pa gsum yin te //

zhes gsungs so // rgyu'i rgyud ni rdo rje 'chang gi rigs can gyi sems can no // 'bras bu'i rgyud ni  
phyag rgya chen po'i dngos grub po //

#### タントラ五分類・五次第・灌頂の区分

thabs kyi rgyud la lnga ste / bya ba'i rgyud dang / spyod pa'i rgyud dang / rnal 'byor gyi rgyud  
dang / rnal 'byor bla na med pa'i rgyud dang / rnal 'byor gong na med pa'i rgyud do // de dag  
las rnal 'byor gyi rgyud dang / rnal 'byor bla na med pa'i rgyud la sogs pa nas rim pa gnyis su  
gsungs so // de yang dgyes pa'i rdo rje las /

bskyed pa yi ni rim pa dang // rdzogs(N rdzod) pa yi ni rim pa gnyis //  
rim pa gnyis la brten nas ni // (Ch461) rdo rje 'chang gis chos bshad do //

zhes gsungs pas / bskyed pa'i rim pa gnyis te / phyi bskyed pa'i rim pa dang / nang zab mo  
bskyed pa'i rim pa'o // rdzogs pa'i rim pa la(D om) gsum ste / rdzogs pa'i rim pa dang /  
yongs(PN yong) su rdzogs pa'i rims pa dang / ngo bo nyid kyi rim pa'o // de bzhin du dbang la  
yang gnyis te / 'jig rten pa'i dbang bcos ma dang / 'jig rten las 'das pa'i dbang ma bcos pa'o //  
bcos ma la gsum ste / slob dpon gyi dbang dang / gsang ba'i dbang dang / shes rab ye shes kyi  
(N192a) dbang ngo // ma bcos pa la gnyis te / chos kyi phyag rgya(N om) dang / phyag rgya chen  
po bzhi pa'o // de yang 'di skad du /

slob dpon dbang ni dang po ste // gsang ba mchog ni gnyis pa yin //  
gsum pa shes rab ye shes te // bzhi pa de yang de bzhin no //

zhes gsungs te / slob dpon gyi dbang ni lus dag (P191b) par byed pa'o // gsang ba'i dbang ni ngag dag par byed pa'o // shes rab ye shes kyi dbang ni yid dag par byed pa'o // bzhi pa ni man ngag ste / byang chub sems kyi sa bon no //

### 根の区分

de la dbang po rab 'bring tha ma'i dbang du byas nas / phyi bskyed pa'i rim pa ni dam tshig gi phyag rgya ste / slob (D170b) dpon gyi dbang dang / bskyed pa'i rim pa lha'i rnal 'byor ro // dbang po tha ma'i las kyi phyag rgya la gnyis te / de bzhin gshegs pa'i dbugs dbyung ba dang / rdo rje 'chang gi dbugs dbyung ba'o // gsang(P gsung) ba'i dbang dang / de bzhin gshegs pa'i dbugs dbyung ba ni nang zab mo bskyed pa'i rim pa'o // rdo rje 'chang gi dbugs dbyung ba ni rdzogs pa'i rim pa'o // de bzhin gshegs pa'i dbugs dbyung ba dang / rdo rje 'chang gi dbugs dbyung ba ni las kyi phyag rgya ste / dbang po 'bring po'o // yongs su (Ch462) rdzogs(N rdzod) pa'i rim pa ni chos kyi phyag rgya ste / dbang po rab po // ngo bo nyid kyi rim pa ni phyag rgya chen po ste / dbang po rab kyi yang rab bo //

### 阿闍梨灌頂 (外の生起次第)

de nas phyi bskyed pa'i rim pa rdo rje slob dpon gyi dbang lus rnam par dag pa bshad par bya ste / chu'i dbang dang / cod pan dang / rdo rje dang / dril bu dang / ming dang / rigs(PN rig) gsum gyi dam tshig dang / snod du bya ba dang / rjes(N rje) su gnang ba dang / rdo rje'i brtul zhugs dang / lung bstan dang / dbugs dbyung ba dang bcu gcig go //

### (五部灌頂・五明灌頂)

#### 1 水灌頂

de la chu'i dbang ni mi bskyod pa'i ngo bo me long lta bu'i ye shes so // de bzhin gshegs pa thams cad 'od (N192b) du zhu ba'i ye shes kyi bdud rtsi'i chus dbang bskur ba ni dper na phyi rol gyi dri ma dag par byed pa ltar 'dir yang ye shes kyi chus ma rig pa'i dri ma \*dag pa (PN om) dang nyon mongs pa'i sgrib pa \*dag par byed pa(PN om) dang / shes bya'i sgrib pa dag par byed pa ste / \*des khyod kyi ma rig pa(PN om) ye shes gang gis dag par byed pa'o zhes khong du chud par bya'o //

#### 2 宝冠灌頂

cod pan ni rin chen 'byung ldan gyi ngo bo mnyam pa nyid kyi ye shes (P192a) kyi rang bzhin gyis dbang bskur ba ni ma 'ongs pa'i dus na sangs rgyas kyi dbu'i gtsug tor gyi sa bon nam che ba'i yon tan yid bzhin gyi nor bu ltar 'byung ba'i sa bon du ster ba'o //

#### 3 金剛杵灌頂

rdo rje'i dbang bskur ba ni 'od dpag tu med pa'i ngo bo(D bos) so sor rtog pa'i ye shes kyi rang

bzhin rten cing 'brel par 'byung ba bcu gnyis kyi 'khor lo rnam par dag pa'i tshul du rdo rje sor bcu gnyis pa lte ba zlum po chos kyi dbyings mtha' thams cad dang bral ba'o // lte ba'i yi ge hūm ni chos nyid mtshon par byed pa ste / ha ni he tu yo ga zhes bya ste / rgyu dang bral ba ste ma skyes pa'o // ū ni rtog(PN rtogs) pa dan bral ba'o // a ni (D171a) a pra ti ha ta zhes bya ba ste (Ch463) mi gnas pa'o // padma'i kha nas skyes pa'i rdo rje'i rtse mo lnga ni padma las skye ba bzhin du 'khor ba'i chos la yang 'dod pa skye bas 'khor ba las skye ba'i phung po lnga rnam par dag pa'o // phyogs kyi rtse mo bzhi dbus kyi rtse mo la phyogs pa ni chos thams cad sems kyi ngo bo ste / sems las logs shig na phyi'i don med do // sems nyid gzung ba dang 'dzing pas stong pa'o // rang rig pa nyid de(PN om) de bzhin gshegs pa'i dbugs dbyung ba'o // me tog gsum gyis(PNom) rwa(D ra) rnam la mtshon pa ni rnam par thar pa'i sgo gsum ste / sems nyid stong pa nyid dang / mtshan ma med pa dang / smon pa med pa stong pa nyid du byed pa ste / rdo rje 'chang gi dbugs dbyung ba'o // de lta bu'i rdo rje slob ma'i lag tu (N193a) gtad pa ni chos thams cad kyi rang bzhin gnyis su med pa'i ye shes mtshon par byed pa ste / dbyer mi phyed pa'i ye shes kyi ngo bo ster ba dang / ngas khyod la gnyis su med pa'i ye shes sbyin no zhes bya ba'i don to //

#### 4 鈴灌頂

dril bu'i dbang bskur ba ni don yod grub pa'i ngo bo bya ba nan tan gyi ye shes kyi rang bzhin te / dgongs pa snga ma'i tshul gyis rten cing 'brel par 'byung ba bcu gnyis kyi 'khor lo rnam par dag pa'i (P192b) tshul gyis sor bcu gnyis pa'o // kha thur du bltas pa ni shes rab kyi padma mtshon par byed pa'o // dbyer mi byed(PN phyed) pa'i gnas chos kyi 'byung gnas rtogs pa'i phyir dril bu'i steng dang 'og gi cha la rdo rje'i phreng ba zung gis mdzes pa'o // sgra dkrol ba ni thabs dang shes rab kyi rdo rje dang padma mnyam par sbyor ba ste / chos thams cad rten cing 'brel par 'byung bas na rang gi ngo bo ma skyes pa ste / sgra de yang btsal na gang nas kyang mi rnyed pa ste / yang dag par rang bzhin med la / de bzhin du chos thams cad rang bzhin med par rtogs(PN rtog) par (Ch464) byed pa'o // khams gsum po(D om) thams cad kyi ngo bo dkyil 'khor du bstan pa'i phyir dra ba dang dra ba phyed pa ste / de la dra ba dang dra ba phyed pa zhes bya ba ni / ha ra dang ha ra a rdha zhes bya ba ste / 'phrog(PN 'phrogs) pa dang 'phrog \*par byed(PN pa phyed) pa zhes bya'o // dra ba ni nyon mongs pa chen po bcom pa'i rtags so // dra ba phyed pa ni nyon mongs pa chung ngu bcom pa'i rtags so // rten gzhal yas khang der brten(PN rten) pa lha'i (D171b) dkyil 'khor bstan pa dang / phung po dang khams la sogs pa de bzhin gshegs par bstan pa'i phyir de bzhin gshegs pa lnga dang lha mo rnam kyi phyag mtshan bkod pa'o // stong pa dang snying rje dbyer mi phyed pa'i rang bzhin nam rgyu bstan pa'i phyir de steng du shes rab kyi gdong bstan pa'o // padma las skyes pa'i rtse mo lnga ni srid pa las skyes pa'i (N193b) phung po'am / sa la sogs pa 'byung ba lnga rnam par dag pa'i ye shes lnga'i ngo bo de bzhin gshegs pa lnga'o // phyogs kyi rtse mo rnam dbus kyi(PN om) rtse mo la phyogs pa ni phung po dang khams dang skye mched la sogs pa'i chos thams cad sems las phyi rol du med de / sems kyi

ngo bo gzung ba dang 'dzin pa'i rtog(PN rtogs) pas stong pa rang rig pa'i ye shes te / de bzhin gshegs pa'i dbugs dbyung ba'o // rwa (D ra) rnams la me tog gsum mtshan (P193a) pa ni rnam par thar pa'i sgo gsum ste / sems nyid stong pa nyid dang / mtshan ma med pa dang / smon pa med pas sems nyid rang bzhin med pa ste / rjo rje 'chang gi dbugs dbyung ba'o // de lta bu'i dril bu slob ma'i lag tu gtad pa ni rjod(PN brjod) par byed pa'i sgra dang chos nyid rtogs par byed pa'i rgyu(PN rgyur) ster ba'o //

## 5 名灌頂

ming(D mig) gi dbang bskur(PN skur) ba ni rnam par snang mdzad kyi ngo bo chos kyi dbyings kyi ye shes kyi rang bzhin te / chos thams cad sgro ma btags pa dang / ming med (Ch465) mtshon par byed pa'i phyir sngar gyi ming dor ba'o // phyis kyi ming 'dogs pa ni me tog gar ltung ba'i rang gi rigs kyi lha las ming drangs nas 'dogs pa ste / bla na med pa'i byang chub kyi go 'phang(PN 'phangs) la 'os pa'am skal ba dang ldan no zhes bya ba'o // de lta dbang lnga po \*de dag(P om) ni de bzhin gshegs pa lnga'i ngo bo yin pas rigs lnga'i dbang zhes bya'o // de bzhin gshegs pa lnga dang ye shes lnga'i rang bzhin gyis ma rig pa bkag nas rig pa'i ngo bor byas pas na rig pa'i dbang lnga zhes bya'o //

## 6 金剛薩埵の灌頂

rjes(N rje) su gngang ba dang / de nas gzhan yang drug pa ni rdo rje sems dpa'i dbang zhes bya ste / rdo rje rigs kyi dam tshig rdo rje ni gnyis su med pa'i ye shes zung du 'jug pa brjod par bya ba yin pas khyod kyis nam yang mi 'bral bar bya zhing rtogs(N rtoḍ) par bya ba'i dam tshig go // dril \*bu'i dbang(PN bu) rigs kyi dam tshig la dril (D172a) bu ni chos kyi phung po brgyad (N194a) khri bzhi stong gi rang bzhin te / rjod(PN brjod) par byed pa yin pas khyod kyis sems can rnams la bsgrag(PN bsgrags) par bya'o zhes rtogs par bya ba ni dam tshig go // phyag rgya rigs kyi dam tshig ni rang nyid yi dam lha'i ngo bor rtogs(PN rtog) par bya ba ni dam tshig go // de dag ni rigs gsum gyi dam tshig go //

## 7 応器〔灌頂〕

snod du bya ba ni dkyil 'khor gyi de kho na nyid dang / dkyil 'khor gyi rnam par dag pa dang / lha'i de kho na nyid dang / lha'i rnam par (P193b) dag pa dang(D om) / slob dpon gyi las dang / dkyil 'khor bsgrub pa'i las dang / bza' ba la sogs pa'i dam tshig go //

## 8 許可〔灌頂〕

rjes(N rje) su gngang ba ni / sems can kun la phan pa'i phyir / sems can kun la thams cad du / ji lta 'dul ba sna tshogs la / chos kyi 'khor lo bskor(PN skor) bar gyis / khod kyis sems can rnams la chos bshad pa dang / dbang bskur bar gyis shig pa'i gngang ba ste / de dag bya ba'i (Ch466) skal ba dang ldan par rtogs(PN rtog) par bya ba'o //

## 9 金剛禁戒灌頂

rdo rje'i brtul zhugs kyi dbang ni phyi rol gyi dka' thub kyi brtul zhugs spangs te gnyis su med pa 'di ni khyod kyi brtul zhugs yin pas zung shig pa'i don \*du rdo rje(PN om) ster ba'o //

## 10 授記

lung bstan pa ni khyod nyid rdo rje sems dpa'o(DP dpa') ste / sangs rgyas kun dang mtshungs pa'o zhes khong du chud par bya'o //

## 11 蘇息

dbugs dbyung ba ni 'di nas bzung nas slar yang(D om) ngan song du mi ltung ngo zhes bya'o // drug po 'di dag ni rdo rje sems dpa'i ngo bo yin pas na rdo rje sems dpa'i dbang zhes bya'o // bum pa'i bya ba thams cad la 'jug pa yin pas na bum pa'i dbang zhes bya'o // slar ngan song du mi skye bas na phyr mi ldog pa'i dbang zhes bya'o // chos bshad pa'i skal ba dang ldan pas na slob dpon gyi dbang zhes bya'o // ye shes lnga'am rigs lnga'i ngo bor lus dag par byed pas na lus rnam par dag pa zhes bya'o // de dag ni bskyed pa'i rim pa'i rdo rje slob dpon gyi (N194b) dbang mdor bsdu te bstan pa'o //

## 和訳

### 果〔乗〕である金剛乗におけるタントラの三分

つぎに、果の金剛乗を述べる。それも以下の言葉で、

義は同じであっても愚昧ではなく、方便が多く難行がなく、利根者を意趣するから真言乗は優れている<sup>53</sup>

と説かれているのであり、義である真如に関して差別はなくても、波羅蜜乗は愚昧であり、教証と理証によって決断して理解するのである<sup>54</sup>。金剛乗は愚昧ではなく、教証と理証とグルの教誡によって覚知するのである。あるいは、難行なく大楽を道とする。波羅蜜乗は捨 (upekṣā) であって (P191a)、覚知が (D170a) ないのである。因を道とするから因乗である。〔金剛乗は〕果を道とするから果乗で優れている。金剛乗についても三つであって、因タントラと方便タントラと果タントラである。それも以下の言葉で、

タントラとは相續であり、タントラの意味は三つであって、因と自性の果と方便の三種である<sup>55</sup>

と説かれている。因タントラは持金剛族の種姓をもつ有情である。果タントラは大印悉地である。



### タントラ五分類・五次第・灌頂の区分

方便タントラは五つであって、所作タントラ・行タントラ・瑜伽タントラ・最上瑜伽(yogottara)タントラ・無上瑜伽(yoganiruttara)タントラである<sup>56</sup>。それらの内で、瑜伽タントラと最上瑜伽タントラなどから二次第として説かれている。それも『ヘーヴァジラ』の中で、

生起次第と究竟次第の二つであり、二次第に依拠して(Ch461)持金剛が法をお説きになる<sup>57</sup>

と言われているので、生起次第は二つであり、外の生起次第と内の甚深の生起次第である。究竟次第は三つであって、成次第と円満次第と自性次第である<sup>58</sup>。同様に、灌頂についても二つであり、人為的な(kṛtrima)世間灌頂と非人為的(akṛtrima)な出世間灌頂である。人為的〔な世間灌頂〕は三つであり、阿闍梨灌頂と秘密灌頂と般若智灌頂である。非人為的〔な灌頂〕は二つであり、法印と大印である第四〔灌頂〕である。それも以下の言葉で、

阿闍梨灌頂は第一で、最勝の秘密〔灌頂〕は第二である。第三は般若智〔灌頂〕であって、第四もまたそれと同様である<sup>59</sup>。

と説かれており、阿闍梨灌頂は身を(P191b)浄化する。秘密灌頂は語を浄化する。般若智灌頂は意を浄化する。第四〔灌頂〕は教誡であって、菩提心の種子である。

### 根の区分

そこで、上・中・下の根を意趣してから、外の生起次第は三昧耶印であり、阿闍梨(D170b)灌頂と生起次第の尊格瑜伽(devatāyoga)である。下根〔者の場合〕の羯磨印については二つであり、如来の蘇息(tathāgatāśvāsa)と持金剛の蘇息(vajradharāśvāsa)である。秘密灌頂と如来の蘇息は内甚深の生起次第である。持金剛の蘇息は究竟次第である。如来の蘇息と持金剛の蘇息は羯磨印であって、中根〔者の場合〕である。円成(Ch462)次第は法印であり、上根〔者の場合〕である。自性次第は大印であって、上根〔者〕のさらに上である。

### 阿闍梨灌頂(外の生起次第)

つぎに、外の生起次第である金剛阿闍梨灌頂は身清浄を釈説するのであり、水灌頂(udakābhiṣeka)・宝冠(mukuta)・金剛杵(vajra)・鈴(ghaṇṭā)・名(nāma)・三印明(金剛杵・鈴・印)の三昧耶(vajragañṭānāmamudrā-samaya)・応器(bhavyatā)・許可(anujñā)・金剛禁戒(vajravrata)・授記(vyākaraṇa)・蘇息(āśvāsa)で十一である。

## (五部灌頂・五明灌頂)

**1 水灌頂**

〔その内〕水灌頂は阿閼〔如来〕の本性である鏡の如き智慧〔が自性〕である。一切如来が光明に融化した智慧の甘露水による灌頂は、例えば〔水が〕外的垢を浄化するように、ここでも智慧の水で無明の諸の垢と煩惱障を浄化し、所知障を浄化するのであり、それによって、「汝が無明を智慧によって浄化する」と證得せしめるのである。

**2 宝冠灌頂**

宝冠〔灌頂〕は宝生〔如来〕の本性である平等性の智慧の自性による (P192a) 灌頂であり、未来時に仏の頂髻の種子や大いなる功德が如意宝珠の如くに生じる種子を与えるのである。

**3 金剛杵灌頂**

金剛杵灌頂は無量光〔如来〕の本性である個別観察の智慧が自性であり、十二支縁起の輪を浄化する仕方として、十二指量の大きさの金剛杵〔である〕。中央の円は法界が一切の辺際を離れている〔ことを表す〕のである。中央の Hūṃ 字は法性を表示している。Ha〔字〕は hetuyoga<sup>60</sup> と言われ、因を遠離して不生である。ū〔字〕は構想作用 (ūha) の遠離〔を表すの〕である。A〔字〕は (D171a) apratiṣṭhita<sup>61</sup> であって、(Ch463) 不住である。蓮華の口から生じた金剛杵の五鈷が蓮華所生である如く、輪廻の法についても欲所生の輪廻から生じた五蘊は清浄である<sup>62</sup>。〔四〕方の四鈷が中央の鈷に〔湾曲して〕向いているのは、一切法は心が本質であり、心を別にして外的な対象はない〔ことを表す〕のである。心自体は所取と能取を欠いているのである。〔それを〕自ら知ることこそが如来の蘇息である。角にある三つの花で表示するのは三解脱門であり、心自体が空性と無相と無願で空となすのであり、〔それが〕持金剛の蘇息である。このような金剛杵を弟子の手に渡すことは、一切法の自性である無二の智慧を含意させているのであり、摧破されない智慧の本性を授けて、「我は汝に無二の智慧を与える」との意味である。

**4 鈴灌頂**

鈴灌頂は不空成就〔如来〕の本性である所作成就の智慧が自性であり、密意は先述どおり十二支縁起の輪を浄化する (P192b) 方法で十二指量〔の大きさの鈴〕である。下向きなのは智慧の蓮華を象徴させるのである。無差別の住処である法源を證得させるために鈴の上下の部分を一対の金剛鬘で美しく〔飾るの〕である。振鈴は方便と般若を意味する金剛杵と蓮華の平等瑜伽であり、一切法は縁起生の故に本不生であり、その音を探し求めても何処にも得られず、眞実は無自性であり、同様に一切法は無自性であると證得せしめる (Ch464) のである。あらゆる三界の本質を曼荼羅として示すために瓔珞と半瓔珞であり、それについて、瓔珞と半瓔珞とは、〔梵語で〕 hāra (*em hara*) と hārārdha (*em harārdha*) と言うのであって、〔西藏語では〕 'phrog pa と 'phrog par byed pa と言う<sup>63</sup>。瓔

珞は大煩惱制圧の徴である。半瓔珞は小煩惱制圧の徴である。所依である無量宮に能依である (D171b) 尊格の曼荼羅を示すことと蘊・界などを如来として示すために五如来と女尊たち (五明妃) の標幟を莊嚴するのである。空悲が不可分なる自性や因を示すために、その上に般若母の顔を示すのである<sup>64</sup>。〔把上部の〕蓮華から生じた五鈷は有から生じた〔五〕蘊、地などの五大、清浄なる五智を自性とする五如来である。〔四〕方の鈷が中央の鈷に向いていることは、〔四〕方〔の鈷が表示する〕蘊・界・処などの一切法は心の外に存在せず、心の本性は所取と能取の構想作用を欠いた自證の智慧である〔ことを表示し〕、如来の蘇息である。角にある三つの花の徴 (P193a) は三解脱門であり、心自体が空性であり無相であり無願であるから心自体は無自性である〔ことを表示し〕、持金剛の蘇息である。このような鈴を弟子の手に渡すことは能詮の音〔を鳴り響かせること〕と法性を證得せしめる因として授けるのである。

### 5 名灌頂

名灌頂は毘盧遮那〔如来〕の本性である法界の智慧が自性であり、一切法を増益せず、名の非有を (Ch465) 象徴させるために以前の名を捨てるのである。後で名を付けることは花が落ちた自らの部族の尊格から名を取って付けられるのであり、無上菩提の位にふさわしい福分を具える者と言われるのである。このように、これら五つの灌頂は五如来を本性とするから五部灌頂と言われる。五如来と五智の自性によって無明を遮遣して明を本性とするから五明灌頂<sup>65</sup>と言われる。

### 6 金剛薩埵の灌頂

許可であるから別に第六は金剛薩埵の灌頂と言われて、「金剛部の三昧耶である金剛杵は、無二の智慧・双運が所詮であるから、汝は決して離すべきではない」と證得させることが三昧耶である。鈴灌頂の明の三昧耶について、「鈴は (D172a) 八万四千の法蘊の自性であり能詮であるから、汝は有情たちに説法すべし」と證得させることが三昧耶である。印契の明の三昧耶は、「〔汝〕自身が守護尊の本性である」と證得させることが三昧耶である。以上が〔金剛杵と鈴と印契の〕三明の三昧耶である。

### 7 応器〔灌頂〕

応器〔灌頂〕は、曼荼羅の眞実と曼荼羅の清浄、尊格の眞実と尊格の (P193b) 清浄、阿闍梨の羯磨と曼荼羅成就の羯磨と飲食<sup>66</sup>などの三昧耶である<sup>67</sup>。

### 8 許可〔灌頂〕

許可〔灌頂〕は、一切の有情利益のために一切の有情に対し一切処であらん限りの方法で教化し、法輪を転じるために、「汝は有情たちに法を釈説し灌頂をなすべし」との許可であり、それらを為す (Ch466) 福分を具えていると證得せしめるのである。

## 9 金剛禁戒灌頂

金剛禁戒灌頂は、「外的苦行の禁戒を捨て、この無二なるものが汝の禁戒であるから執持せよ」との目的で金剛杵を与えることである。

## 10 授記

授記は、「汝自身が金剛薩埵であり一切諸仏と等しい」と了解させるのである。

## 11 蘇息

蘇息は、これ以降、再び悪趣に堕ちないということである。これらの六つは、金剛薩埵を自性とするから金剛薩埵の灌頂と言われる。一切の瓶の所作に入るのであるから瓶灌頂 (kalaśābhiṣeka) とされるのである。再び悪趣に生まれぬから不退転の灌頂と言われる<sup>68</sup>。法を釈説する福分を具えるから阿闍梨灌頂と言われる。五智あるいは五明を本性として身を浄化するから身清浄と言われる。

以上が生起次第の金剛阿闍梨灌頂を要約して示したものである。

## 考察

無上瑜伽階梯で確立した四灌頂体系は、用語・所作の細部に渡っては限りないヴァリエーションを保ちながらも、その構造は、瑜伽タントラ階梯で成立した瓶灌頂 (阿闍梨灌頂) を土台にしてその上に秘密灌頂、般若智灌頂、第四灌頂を接木したものであることに変わりはない。GPU の当該箇所は、無上瑜伽階梯の最盛期に活躍したヴァジラパーニが記した阿闍梨灌頂の概括である。そこには、瑜伽階梯を包摂して成立している無上瑜伽階梯の自己理解が表出されていることは言を俟たない。

これまで、実に多くの研究がなされてきたこの分野で、両階梯の接合点に精通した上で阿闍梨灌頂の骨組みを論じているのが桜井『インド密教儀礼研究』である。ここでは、GPU のこれ以降の理解のために「五種灌頂と五智・五仏」の箇所を引用する。

五仏に五智を対応させる理解は『真実摂経』を奉ずる中期密教の段階で確立していたことが既に明らかになっており、その場合主尊である毘盧遮那に清浄法界智が対応せしめられ、阿閼に大円鏡智が配当されている。それが阿閼の部族を重んじる無上瑜伽タントラ階梯では、毘盧遮那と阿閼の地位が入れ替わり、それに連れて五智配当の仕方も変化し阿閼に清浄法界智を充当することが多くなったと言われている。しかし、先に確かめたように、瑜伽タントラ階梯と同一の毘盧遮那に清浄法界智を充当する仕方も多くの文献で用いられている<sup>69</sup>。

因みに、マイトリパ作 *Sekakāryasaṃgraha* (灌頂略集), *Samkṣiptasekaprakriyā* (灌頂作法略撰) とヴァジラパーニの GPU も毘盧遮那に清浄法界智を配当する法規に従っている。

当該和訳は、インド仏教綱要書 GPU の「金剛乗の部」の一部分に過ぎない。以下は次号に発表を予定している。

- 
- 1 Hevajratantra の各所に見られる四印契の順序を巡る両論に言及した論文は多い。[Isaacson and Sferra: 94~111] はインド金剛乗における主要な論争の一つとして両論の要点を纏めている。
  - 2 邦文の本稿ではインド・チベット人名の多さの理由から、読解に際しての多様な日本語表記法の利点を勘案した上で、原則として地の文では「ヴァジラパーニ」とカタカナ表記、括弧内および引用文献の邦訳中では「Vajrapāṇi」とローマ字表記する。他のよく知られた人物についてもそれに準じる。
  - 3 磯田熙文「pāramitā-yāna と mantra-yāna」は、師匠マイトリパ（アドヴァヤヴァジラ）作『真理の宝環』と弟子ヴァジラパーニ作 GPU の二つのインド仏教綱要書を取り上げ、マイトリパの法統の全体像を論じる基礎的な論究である。ただ惜しいことは、ヴァジラパーニの名で西藏大蔵経に出る著作には、マイトリパの高弟ヴァジラパーニと時輪教の初期の学匠と見られるヴァジラパーニが別人であることが検討されていない。筆者も『ガナチャクラの研究』『ガナチャクラと金剛乗』において、「複数のヴァジラパーニ」の問題に気づいていない。ここで訂正しておきたい。
  - 4 『青冊史』65-66, Kha.5a7-b1, BA p.72.
  - 5 『青冊史』356, Nya.3b4-6, BA p.404.
  - 6 Devākaracandra の名は、西藏大蔵経に自作 *Nairātmakopadeśa* (Toh 1312)、*Kṛṣṇayamārimukhaṣaṭcakra asādhana* (Toh 2015) と Advayavajra 作 *Mahāmāyaviṃśati* (Toh 2248) の翻訳協業者として出る。彼の事績は『青冊史』347~348, Ja.18a7~19b5, BA p.392~396 に出る。
  - 7 『青冊史』746, Da.2b2-7, BA p.842. [高橋: 268]
  - 8 『青冊史』747, Da.3a1-4, BA p.843.
  - 9 [高橋: 267] は現在のパタン市の古名であると書く。Roerich は Kāthmāṇḍau とする。ヴァジラパーニが Ye rang に住んで布教を行っていた様子が彼の著作 *Bhagavatīprajñāpāramitāhrdayatikārthapradīpa* (Toh 3820) の付記に記されている。[高橋: 288~290]
  - 10 [高橋: 269]
  - 11 『青冊史』758-759, Da.8b3-9a7, BA pp.855~857.
  - 12 'di 'dra na kho'i pha de yang gshad ma cig min nam /  
Roerich は「もしそうならば、彼の父親（師匠）も本物（の師匠）ではないだろう」と訳する。筆者は gshad ma を gshed ma（絞首刑執行人）の誤記とみて和訳した。
  - 13 『青冊史』758-759, Da.9a7-9b3, BA pp.857~858.
  - 14 『青冊史』348, Ja.19b2-5, BA pp.395~396. この引用の最後のチベット文は以下である。  
phyag na sku bsod che bas spyān mi 'drons snyam nas / Devākara[candra]spyān drangs pas sku bsod tsaṃ ma byung /
  - 15 Roerich は Toh 3802, Ota 5203 *Śatasāhasrikāvyaḥkhyā* とする (BA p.859)。
  - 16 Roerich は Toh 3806, Ota 5204 *Prajñāpāramitākośatāla* とする (BA p.859)。

17 『青冊史』 761, Da.10a3-6, BA pp.859~860.

18 [Roerich: 865] は当該著作を Toh 122 *Ātajñāna-nāma-mahāyānasūtra* とするが内容的に間違いと思われる。

19 『青冊史』 766, Da.12b3-5, BA p.865.

20 [Sanderson: 100~103]

21 *gaṅgādhari phyed kyi go 'phang can yin par grags so* の意味が筆者には不詳である。

22 『七教勅』 567L3-568L4, [Templeman:13]

23 『アティシャ伝 (広本)』 231.

その時に、尊者 Nāro パンチェンがヴィクラマシーラ僧院へやって来たので、出家の全員が歓迎して、Atiśa も右手で支え、Jñānaśrīmati が左手で支えて輿に招いたのである。その時に、尊者 Nāro-pa が「尊者ディーパンカラよ、今日では、私の教説の上首は汝である」と私の教説を引き渡したところ、尊者 Atiśa が「貴方様は太陽と月の如くに住しておられるが、拙僧は螢の如くに世間を照らすことさえも出来ましようか」とお尋ねになったので、[Nāro-pa が]「私はもう先が長くはないので、私の教説の上首は汝である」と仰った。そして、そこで二十日ばかり滞在なされて、尊者 (アティシャ) と Nāro-pa の二人はお互いに法を尋ね合うことはなかったと Nag tsho が仰った。

24 [静 2015: 69]

25 [Davidson 2002: 233]

八世紀初頭の出現とその 600~700 年後に消滅するまでの期間に、仏教の成就者は、そのいずれの時点でも絶対数はごく僅かであったとしても、北インド・ネパールや他の至るところで仏教徒のコミュニティの想像力を捉えた。その新しい理念は、遙かに古い成就者の伝統の要素を採用することと非仏教的要素が仏教徒の環境に攻撃的に侵入してきたこととの両方から興った。

26 マイトリパ作 *Sekanirdeśa* のチベット語翻訳者はナクツォである。筆者が依拠したチベット大蔵経 D,P は関与したインド人学匠として *Kṛṣṇapaṇḍit* の名がある。しかし、[Isaacson and Sferra: 114] は、他の *Sekanirdeśa* のチベット語訳から、関与したインド人学匠はヴァジラパーニの可能性が高いとする。

27 [Isaacson and Sferra: 84 fn106] は、「この *Vajrapāni* は初期時輪教の学匠の一人の名前 (あるいは pseudonym, 偽名・筆名)」と述べる。

28 [Isaacson and Sferra: 113]

29 [Isaacson and Sferra: 117]

30 [川越 2000, 2001]

31 ナクツォについての詳細な研究にもかかわらず、川越が彼の没年に言及していないことが筆者には疑問として残る。昨今多くの学者が依拠している BDRC [P3456] には、He (Nag tsho) passed away in 1064 とあるのみで、その典拠は示されていない。

32 [羽田野 1986: 87~88] [川越 2000: 308]

33 [Stearns: 60] によれば、*rMa ban Chos 'bar* の妻は成就者 *Ma gcig Zha ma* (1062~1149) である。

34 『青冊史』 196, Nga.7b4-6, BA p.219.

35 『青冊史』 357, Nya.4a1-2, BA p.405, [Stearns: 60] には、彼の没年は 1089 とある。

- 36 [Isaacson and Sferra: 84fn106] は、rMa ban Chos 'barではなく、mTshur ston Ye shes 'byung gnas であるとする。
- 37 [Davidson 2004: 408-409fn80] は、dPal sde に娘はいないとの資料から、Stearn の言明を否定する。その上で、「Stearn は遊牧民と王女との結婚を事実とと思っているようである。ドクミのような平民と王女との結婚などおおよそあり得ない。ただドクミの妻が王国滅亡後の四分五裂の間に成り上がった王族を詐称している貴族の一族出身ならば、それもありうるかもしれない」と述べる。
- 38 [Davidson 2004: 161~209] [静 2015b: 166~167]
- 39 [Davidson 2004: 182] は、「ドクミ死去の確たる日時は分からない。彼は十一世紀の第三四半期を越えて生きてはいなかったであろう。rTse lde が施主で行われた丙辰（ひのえたつ、1076）の法論の時にさえ生きていたことを示すものはないからである。ドクミは、「ドムトゥンが 1064 年に死去した同じ頃に逝去した」と述べる『青冊史』が最も正確な言明であろう」とする。
- 40 『青冊史』 146~147, Ga.28b4-29a5, BA pp.162~164.
- 41 『青冊史』 338~339, Ja.14b5-15a5, BA pp.383~384. この箇所に出る Mar Do がインドでナーローパと出会う物語は、アティシャ招請の目的でインドへ行ったナクツォが、機会があつて phullahari の地でナーローパを垣間見ることができた話 (Davidson2002: 317) に構成が類似している。事実関係は再考の余地があろう。他方 Mar Do の逸話が事実だとすれば、それはナーローパの逝去 (1040) 以前の出来事となる。そこで 1017 年生まれ of ヴァジラパーニを考えると、ネパールに住んで教師として活動をする彼は 23 歳のかなり前となる。
- 42 この人物は Rwa lo tsā ba rDo rje grags の随順者としても現れる (『青冊史』 332, Ja.11b7, BA p.376)。
- 43 [BDRC: P4308] によれば、mTshur 一族から出てヴァジラパーニと翻訳の協業をしているこの人物は mTshur ston Ye shes 'byung gnas とは別人である。このことが、奥書に mTshur とのみ書かれたチベット人訳経師の同定を困難にしている。ヴァジラパーニの関わりを主眼にした本稿では、mTshur とのみ出る場合は、Ye shes 'byung gnas (Jñānākara) に分類した。
- 44 D,P 共に奥書には Devacandra と出るが、『青冊史』746, Da.2b2-7 によって Devākaracandra に訂正する。
- 45 『青冊史』に、ヴァジラパーニの弟子と出る gNyan Dharma grags との関係が不詳。
- 46 この人物については不詳。
- 47 [高橋: 272~293]
- 48 この問題について、[羽田野 1987: 245] は以下のような具体例を挙げている。  
アティシャをガーリーに招くために、ガーリーの王室は多大の費用と人命を消費した。この負担の過重なことは ガーリーの王自らも告白し、アティシャ自身も認識していた。それにもかかわらず、彼はあらためて 300 srañ という大金を王から受け取り、例の《菩提道灯》を説いた。またリンチェンサンポは、仏典及び供養礼拝のための器具と仏像を除いたすべてに、黄金 108 srañ を添えて贈呈し、はじめてアティシャからチャクラサンバラとターラーの成就法に関する優婆提舎をえたのであった。もってアティシャが、当時としては如何に莫大な額にのぼる黄金をうけたか、想像に余りがある。  
また、[羽田野 1987:253fn10] にはこうもある。  
これらの黄金が如何に高額なものであるか、次の例によってもほぼ推定できよう。ナクツォ翻訳官がアティシャ招請のためにインドに派遣され、2 年間にわたる路銀・滞在費等の一切をまかなう費用として 7 srañ、その従者は 1~2 srañ の黄金を王から下附された。しかも彼らは決して貧しい旅

をつづけたわけではない。

- 49 スネルグローヴは大乗菩薩の「願成輪廻」「無住处涅槃」の思想を歴史上で最も崇高な理念の一つであると言う。この気高い理念と現実との乖離・落差をインドとチベットの宗教家たちが葛藤なく丸める「二諦と空性の論理」には舌を巻くものがある。
- 50 筆者は以前にこの種の施設が、タントラ文献に出る *matha* である可能性を論じた。
- 51 [羽田野 1986: 80]  
 (ドムは) 近所にいた *Sgra'i tsher ma* と呼ばれたあるパンディタに多くの言語を学んだ。「現在インドにおいて誰が偉大ですか」と尋ねると、かのパンディタは「私がインドにいたときには、ナーローパが偉大であった。しかし、王族から出家した比丘 *Dīpaṃkara-srījñāna* というものがいたゆえ、彼が現在生存しておられれば、このお方が偉大になっていることだろう」と仰ったので、[*Dīpaṃkarajñāna* の] 御名を聞いただけで〔ドムは〕大信が生じた。「今生において彼と遇えれば」と想う大願望も生じた。
- 52 [宇井: 7~8, 38] ここに出る *Sekanirṇaya* が *Sekanirdeśa* であることについては [密教研究会 1991: 276(61) fn3]
- 53 [宇井: 8, 38] *ekārthatve 'py asaṃmohāt bahūpāyād aduṣkarāt / tīkṣṇendriyādhikārāc ca mantraśāstram viśisyate // (36)*
- 54 [磯田: 121] には、「この偈は、必ずしも説得力を持つものではなく、Devacandra の *Prajñājñānaprakāśa* などに、波羅蜜乗からの反論を予想した議論にそれを窺うことができる」とある。
- 55 『秘密集会』18 (33)
- 56 [静 2006] [Isaacson and Sferra: 337, 256fn6] , ヲァジラパーニも *Rāmapāla* もタントラ五分類法をとっている。五分類法では、最上瑜伽タントラが父タントラ、無上瑜伽タントラが母タントラに当たる。
- 57 『二儀軌』HV I -8(24cd-25ab)
- 58 マイトリパの学統に独自のこれら五次第の梵語は、*bāhyotpattikrama*, *gambhīrotpattikrama*, *utpannakrama*, *pariniṣpannakrama*, *svabhāvīkākrama* である。[Isaacson and Sferra: 351, 353]
- 59 『秘密集会』18 (113)
- 60 チベット語訳の音写 *hetuyoga* では意味が通らない。[密教聖典研究会 (11): (112)] では、*ha iti hetuviyuktah* である。音写の *he tu yo ga* に拘ると梵語原文は *hetutyāga* であった可能性もある。
- 61 [密教聖典研究会 (11): (112)] *aṃ ity apratiṣṭhitah* から、音写の *apratihata* を *apratīṣṭhita* に訂正した。
- 62 筆者には、*padma'i kha nas skyes pa'i rdo rje'i rtse mo lnga ni padma las skye ba bzhin du 'khor ba'i chos la yang 'dod pa skye bas 'khor ba las skye ba'i phung po lnga rnam par dag pa'o* の文意が不詳である。
- 63 この「瓔珞と半瓔珞」の梵語と西藏語指示箇所が翻訳者による挿入ではないとすると、ヴァジラパーニは当初からチベット人読者を想定して著作していることになる。
- 64 [密教聖典研究会 (11): (114)] は *upari prajñāmukhākhyānam* 「上に般若母の顔を示すのである」。
- 65 [密教聖典研究会 (11): (110)] *atra ca pañcābhīseko vidyābhīsekaḥ pañcesu locanādividyāyāḥ vyāpārāt //* 「このうち、〔水乃至名の〕五灌頂は、〔この〕五〔種それぞれ〕においてローチャナーなどの明妃が用いられるので明灌頂〔とも言われる〕。
- 66 「金剛乘根本過」に出る五甘露・五灯明などの三昧耶食を指す。



- 67 応器灌頂の梵語原文は〔密教聖典研究会 (11): (116) LL11-13〕から回収される。  
 maṇḍalatatvaṃ mṇḍalaviśuddhilakṣaṇaṃ devatātattvaṃ devatāviśuddhilakṣaṇaṃ ācāryaparikarma ca  
 maṇḍalasādhanañāṇaṃ pañcapradīpapañcāmṛtabhākṣaṇaṃ ca bhavyatā /
- 68 〔密教聖典研究会 (11): (108)〕 avavartikābhīṣekās caite śaṭṭathāgatasvabhāvavāt 「またこれらは六如来を本性とするが故に不退転灌頂 [とも言う]。』
- 69 〔桜井: 107〕 参照。  
 管見では、無上瑜伽階梯の典籍において五仏が論じられる場合、主尊が毘盧遮那から阿閼に変更されている場合はむしろ少数であると思われる。それは誰もが知るように、第六仏としての金剛薩埵（大持金剛）の別立とそれがシステムに統合され結果であろう。瑜伽階梯と区別される無上瑜伽階梯のメルクマールの一つに毘盧遮那から阿閼への主尊の変更を挙げる定説は再検討が必要である。マイトリパの学統は、阿閼と金剛薩埵の両尊格を識と空の概念として持ち出しユニークな成覚論を展開する。

## 略号

- A: author (著者)  
 ad: addition (追加)  
 b: birth year (生年)  
 BA: *The Blue Annals*  
 BDRC: Buddhist Digital Resource Center  
 Ch: 中華大藏經丹殊爾  
 D: デルゲ版西藏大藏經  
 ed: edition (編集)  
 em: emendation (訂正)  
 fn: footnote (脚註)  
 L: line (行)  
 N: ナルタン版西藏大藏經  
 om: omission (欠如)  
 P: 北京版西藏大藏經  
 p: page (頁)  
 Rev: revisor (再治者)  
 ŚPS: Śata-Pitaka-Series  
 Tr: transtator (翻訳者)

## 参考文献

### 一次資料

- アティシャ伝 (広本) : Helmut Eimer (ed) , *rNam thar rgyas pa* 2.Teil, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1979.
- 七教勅 : Tāranātha, *bKa' babs bdun ldan, The Collected Works of Jo nang rje btsun Tāranātha*, vol.16, Smartsis shesrig Dpempzod, C. Namgyal and Tsewang Taru, Leh, Ladakh, 1985.
- 真理の宝環 : *Tattvaratnāvalī* by Advayavajra, Ui,H.(rev), 『大乘仏典の研究(大乘仏教研究1)』 岩波書店, 1979 (1963) .
- 上師相承次第口訣 (GPU) : Vajrapāni, *Guruparamparakramopadeśa*, Toh 3716.

青冊史 : 'Gos gZhon nu dpal, *Deb ther sngon po*, ŚPS vol.212, International Academy of Indian Culture, New Delhi, 1974.

二 儀 軌 : Snellgrove, D.L. (ed) *The Hevajra Tantra: A Critical Study*, London Oriental Series 6, Oxford University Press, 1959., Toh 417, 418.

Farrow, G.W. and Menon, I. (ed) *The Concealed Essence of the Hevajra Tantra*, Motilal Banarsidass, Delhi, 1992.

秘密集会 : 松長有慶 (ed) ,『秘密集会タントラ校訂梵本』東方出版 ,1978., Toh 442, 443.

## 二次資料

磯田熙文 「pāramitā-yāna と mantra-yāna」『東北大学文学部研究年報』28, 1978.

川越英真 「Nag tsho Lo tsā ba について」『東北福祉大学研究紀要』25, 2000.

「Nag tsho Lo tsā ba について (2)」『東北福祉大学研究紀要』26, 2001.

桜井宗信 『インド密教儀礼研究』法蔵館 ,1996.

静 春樹 「金剛乗とタントラ分類」『密教文化』217, 2006.

「マイトリパの僧院追放とアティシヤ」『密教文化研究所紀要』28, 2015a.

『ガナチャクラと金剛乗』起心書房 ,2015b.

下田正弘 「初期大乘經典のあらたな理解に向けて : 大乘仏教起源論再考」『智慧・世界・ことば』春秋社 ,2013.

高橋尚夫 (訳) 「ヴァジュラパーニ般若心経註・義灯」『般若心経註集成』〈インド・チベット編〉起心書房 ,2016.

羽田野伯猷 「カーダム派史」『チベット・インド学集成』1, 法蔵館 ,1986.

「衛へのアティーシヤ招請 : その背景と歴史的意義」『チベット・インド学集成』3, 法蔵館 ,1987.

密教聖典研究会 「アドヴァヤヴァジュラ著作集 : 梵文テキスト・和訳」『大正大学総合佛教研究所年報』10~13, pp.178~234, 200~259, 282~316, 242~291; 1988~1991.

Davidson, D, *Indian Esoteric Buddhism: A Social History of Tantric Movement*, Columbia University Press, New York, 2002.

*Tibetan Renaissance: Tantric Buddhism in the rebirth of Tibetan Culture*, Columbia University Press, New York, 2004.

Isaacson, H and Sferra F, *The Sekanirdeśa of Maitreyañātha (Advayavajra) with the Sekanirdeśapañjikā of Rāmapāla: Critical Edition of the Sanskrit and Tibetan with English Translation and Reproduction of the MSS*, Universita Degli Studi di Napoli L'Orientale, Napoli, 2014.

Roerich, G.N. (tr) ,*The Blue Annals*, Motilal Banarsidass, Delhi, 1976 (1949)

Sanderson, A, *The Śaiva Age, The Rise and Dominance of Śaivism During the Early Medieval Period, Genesis and Development of Tantrism*, Institute of Oriental Culture

University of Tokyo, 2009.

Stearns, Cyrus, *Luminous Lives, The Story of Early Masters of the Lam 'bras Tradition in Tibet*, Wisdom Publications, Boston, 2001.

Templeman, D, *The Seven Instruction Lineages by Jo Nang Tāranātha*, Library of Tibetan Works and Archives, Dharamsala, 1983.

(本稿執筆に際して、2019年佛教大学における日本印度学仏教学会学術大会口頭発表の場で、苫米地等流(人文情報学研究所)先生から、Rāmapāla 作 *Sekanirdeśa*、および同文献に関する Harunaga Isaacson, Francesco Sferra 両先生の著作の重要性をご教示いただきました。また本稿の投稿に際しては、査読者の先生より懇切丁寧なご指導を頂戴し蒙を啓くこと多であった。ここに記して謝意を表します。)

**キーワード** : ヴァジラパーニ マイトリパ (アドヴァヤヴァジラ) ラーマパーラ ナクツォドクミ インド金剛乗 『上師相承次第口訣』

